早稲田學報

大正六年　第貳百七拾四號　十二月十日發行　毎月一回十日發行

本號目次

意見

武士的精神を以て工業界に活動せよ　大隈總長

校報

講師囑託──講師辭任──校規改定調査委員會──商科教授部會──御大典紀念事業資金寄附申込──科外講義──應用化學科教室新築工事──商科委員任命──體育部各部委員任命──朝鮮留學生に賞金授與──工手學校の修學旅行

面影

校友……少壯實業家……原安三郎氏

校友會報

臨時校友幹事會──臨時全國校友大會──辰政倶樂部祝賀會──芙蓉會──大阪早速會──水戸臨時校友會──長崎校友會──上海校友會──北京に於ける同學會──校友有住庄之助君逝去──早稲田倶樂部の移轉──校友動靜

學會會合

溫交會──前幹部招待有志會──早稲田美術研究會──月曜會──東洋會

學生會合

露語研究會成る──早稲田ローマ字ひろめ會の設立──六機會成る──秋瀞會研究會成る──英語會──交通科專攻部懇親會──ゼミナリー外國貿易科横濱見學──時雨會懇親會──稲香會──稲友會秋季大會──愛知縣人會成る──埼玉縣人會の田中唯一郎氏慰勞會──東亞倶樂部支那旅行記──大阪同攻會

運動

野球團の臺灣馬尼剌遠征──野球部消息──競走部競技大會──稲門艇友會

雜報

大隈維持員一行の歸京──學生處分──日清生命保險會社祝賀式──佐々講師の逝去──菊池溪琴先生の贈位

東京牛込

早稲田大學校友會　電話番町五三〇〇番　振替貯金口座番号東京八九八六番

意見

武士的精神を以て工業界に活動せよ

（稻友會に於いて）

總長　侯爵　大隈　重信

將來大なる希望を以て今將に勉強しつゝある所の青年諸君に向つて、今日一言の注意を與へることは、私の非常に欣びとする所である。今世界は敵味方共に何れも殆ど近來の言葉で言ふと、動員を行うて居る。動員と云ふのは總ての人を……工業に從事しない人、若しくは若い人などを戰場に送つて戰ひに從事せしめて居るのであります。其の效果を見ると、是は英國の文部大臣であるヒッシャーと云ふ著名な人ですが、此人の演說の一節を見ると、小學全科を終つた一向兵の訓練をしたことのない者を戰場に送つて戰ひに從事せしめて居るが、非常に兵として勇敢なものである。而して中には士官となつて活動して、大なる勳功を顯して居ると云ふことが、各司令官からの報告であると言ふて居ります。其處で工業である。工業も亦國に取つては大なる必要なもので、各國とも此工業と云ふことに大に注意し大なる努力を拂つて居るのである。元來普通教育あるものは、人間が將に人の勉むる義務を教ゆるもので、人として爲すべき道を教ゆるのであります。而して概括した所の科學的知識、之を吸入するので、其學んだ所のものがどれだけ國に必要であり、大なる活動をするか、其歸する所を云ふと、軍事であれ工業であれ、皆悉く之れに基いて同一に行はれるのであつて、人間の物の必要に應じて、自然の機能が發揮して、而して活動するのであります。

今諸君は一般の工業の知識と云ふよりは、或る專門の知識を學びつゝあるのである。然るに、今工業の勃興と共に、工業に從事する人が缺乏して居るので困つて居る。而して是は何に依るかと云ふと、戰ひの爲である。戰ひに依つて起れる工業の勃興の爲め、之に從事する者の缺乏を來して居るのである。此時に當り十分なる專門の學を修めた者が、其必要を充すことが出來ないと云ふことは、甚だ遺憾のことである。然るに玆に諸君の如き青年のあることは、之に對して何れも手を額にして、どうか早く速かに來らんことをと待つて居るのであります。斯の如き狀態で、諸君の如き學びつゝある者は、非常に幸福である。其才智は必要に應じて發達すべきものである。能く人が云ふ諺であるが、今日世界の大なる發明は工場から起ると云ふ位で、其眞理を研究する大なる發見は學者等にあるでありませうが、人生の必要に應じて、其必要なる發明を爲すは、何處から起るかと云ふに、工場から起ると云ふても敢て過言でないと思ふ。さうなると諸君は一般の原則を學んで、直ぐ工場に働く。次いで、其研究を必要に應じて應用活動すると、意外なる大發見は諸君の中から起るのである。時代の勢ひは其必要に應じて諸君を迎へつゝあるのである。斯う云ふ時に學ぶのは諸君の幸福である。

今日歐羅巴に於ては、殊に米國などに於ては、日本の所謂武士的精神、此武士的精神なるものを非常に重んじて居る。武士的精神の最も重んずるものは義務である。武士的精神なるものは、正道なる事に向つては、其生命を犧牲とするも憚らない。是が武士的精神である。而して此武士的精神を軍隊に應用すれば、組織となり規律となり、而して勇敢なる働きをする。併ながら武士的精神は利己的精神を許さない。之を一般より云へば、工場の爲め、社會の爲め、進んでは國の爲め、國際の競爭の爲め活動するのであります。工場を盛んにする、社會を利せしむる、而して結局は國家に利あらしむるのである。總て何事に依らず此武士的精神を重んずることは肝要である。所が、動もすると、青年と云ふものは、慾望と云ふものが沸々としてあるから、早く自己慾望の達せられんことを欲するのである。是は大に戒心せなければならぬ。武士的精神の重んずる所は、正道なる働きである。而して之に依つて努力せんか、其利益は名譽となり、之に依つて工業も發達すれば、產業も發達し、經濟的發達も行はれて、世界に於ける有らゆる競爭に打勝つことが出來る。工場に於て其精神の下に努力する、其結果は工場も盛大となり、會社も發展して大なる利益を得る。而して其分け前は必ずや諸君の所に來る。大に諸君は武士的精神に依つて働かなければならぬのである。努力して而して成功し、御褒美を得る。頗る潔よいことである。御褒美を目當に働く。是は甚だ不潔なことで、武士的精神に副はない。

諸君の前途は洋々たるものである。大に勵んで洋々たる此の世の中に出て、十分なる働き武士的精神の下に活動することを我輩は望むのである。併ながら、餘り高等の教育が濟んだからと云うて、得意になつて居つてはならぬ。自信力が必要である。高等の教育を受けた以上は、其得たる力を大に發揮し、而して社會の爲め、國家の爲め、大に發展して其進歩を來さなければならぬ。諸君が學校を出で工場なりに就職する。就職した以上は、此武士的精神を發揮して、其工場の盛んならんことに努める。其基く所は力である。熟練である。一種の技術である。藝である。而して努力した結果は工場を支配するやうになり。管理するやうになり。經營するの法も、是から起るのであります。洵に羨しい。我輩も今一度青年になつて諸君と學びたい。斯う云ふ時は天佑に乘じたのであります。勃興しつゝある工業に向つて、大に諸君は努力すると、頗る愉快であるのである。愉快に學び、愉快に勉强し、而して國家の爲め、社會の爲め發奮せんことを我輩は諸君に希望する次第であります。夫れと共に大に身體を强健にし、大に努力せんことを冀ふのである。

校報

◉講師囑託　今回左の講師を增聘し、頭書の學科擔任を囑託せり。

貨幣及銀行論	ドクトル、デル、フイロソフイー	宇都宮　鼎氏
商法	法學士	三橋　久美氏
獨法リスト刑法	法學士	木村　尙達氏
應用力學	工學士	野口　尙一氏
機械工學	工學士	楠　正伯氏
製圖		志水　直彥氏

●講師辭任　講師岡見愼二、竹村勘忍兩氏は今回辭任せられたり。

◉校規改定調査委員會

其の第一回會議を十一月二十八日午前九時恩賜館會議室に開く。出席は

澁澤男爵、中野武營、平沼淑郎、德永重康、宮川鐵次郎、內ヶ崎作三郎、上原鹿造、增田義一、山岡英太郎、浦部襄夫、渡邊亨、早速整爾、宮井安吉、田中穗積、鹽澤昌貞、永井一孝、寺尾元彥、中桐確太郎、松平康國

の各委員。平田讓衛、昆田文二郎兩委員缺席。先づ役員の選擧を行ひたる處、左の如く當選せり。

會長　男爵　澁澤　榮一氏
副會長　中野　武營氏
幹事　平沼　淑郎氏

後ち、校規改定委員會規程に就き協議の結果其の第五條第三項

幹事は會長の旨を承け庶務に從事す

とあるを

幹事は會長の旨を承け會務を處理す

と改め、又第六條

校規改定調査委員會に於ては調査委員に非ざる教授會議員及評議員並に講師の出席を求め其意見を聽取することを得

とある

教授會議員及評議員並に講師

の十三字を削り、代りに

者

の一字を加へて

校規改定調査委員會に於ては調査委員に非ざる者の出席を求め其意見を聽取することを得

と改むることゝし、終つて散會せり。

●商科教授部會　十一月廿四日午後一時より會議室に於て商科教授部會を開き、第一學期試驗其の他に就き協議する所ありたり。

◉御大典紀念事業資金寄附申込（續五月號）

（自大正六年四月廿日至大正六年十一月廿七日）

一金貳萬四千五百圓（指定基金）　小池　國三君　東京
一金壹千圓　四ッ谷四郎君　大阪
一金壹千圓　藤崎三郎助君　東京
一金壹千圓　前島男爵壽像建設事務所
一金五拾圓　陳　日平君　同
一金五拾圓　德永　七名　支那
一金四拾圓　外　庸君　東京
一金參拾圓　望月　世教君　同
一金參拾圓　井上賢太郎君　朝鮮
一金參拾圓　高橋　三郎君　東京
一金拾五圓　永山　孝造君　朝鮮
一金拾參圓拾八錢　阿部　吾市君　東京
一金拾圓　燕　世　奇君　支那

計金貳萬七千七百參拾八圓拾八錢

累計金六拾壹萬參千四百六拾貳圓八拾七錢

◉科外講義

政治經濟科三年生の爲め左の科外講義を十一月二十日(火)及十二月四日(火)の二回に涉りて開催し、何れも講堂に於いて講演ありたり。

近世に於ける植民勃興の原因

農學博士　法學博士　新渡戸稻造氏

◉應用化學科新築工事

豫ねて計畫中の應用化學科建物は次に示す大さ及構造設備に從つて十一月十五日請負入札に附したる處、東京淸水組の落札、目下工事着手準備中なり。

該建物の建築位置は現採鑛科教室建物の裏手なり。

早稲田大學應用化學教室新築工事（抄錄）

一、煉瓦造二階建　此延坪參百參坪
　但し各階壹百五拾壹坪五合宛
二、木造平屋建　此延坪拾八坪貳合五勺
　但し揮發物室　六坪貳合五勺
　臭瓦斯室　參坪
　渡り廊下　參坪五合
　便所　參坪
　同渡り廊下　貳坪五合

右構造併に設備の概要左の如し。

一、煉瓦造の部

一、基礎　割栗及「コンクリート」地形
二、壁體　周壁及び主要間仕切壁は煉瓦一枚半外廻り半枚此の控壁付梁受及び階段石等の外凡て煉瓦其他木造間仕切壁下は腰煉瓦積を厚一枚とす、
三、屋根　石盤葺、棟、下り棟、及軒樋庇、屋根共銅枚使用、
四、床　階下の廊下、兩翼實驗室倉庫藥局並に廣間は「コンクリート」打ち「アスファルト」其他は木造並通板張り階上兩翼實驗室、兩講義室、圖書室並に助教授室は二重板張り其他並通床とす、
五、天井　木造とす、
六、壁塗　內部煉瓦及び木造共漆喰壁とす、
七、木部　總て見え掛り內外共ペンキ塗とす

二、附屬屋

一、基礎　割栗及び煉瓦積、
二、壁體　木造內外板張り、
三、屋根　石綿板（アサノスレート）葺、
四、床　割栗地形コンクリート打ち上端アスファルト塗とす、
五、天井　臭瓦斯室及び揮發物室棹緣天井其他晒小屋、
六、周圍流し　揮發物室木造亞鉛板張り臭瓦斯室は鉛板張りとす、
七、換氣穴　窓の上下は連子窓及臭瓦斯室換氣煙突取附け、

三、全設備

一、壁付實驗臺　元素分析室周圍机は鐵筋コンクリート造り其他木造瓦斯バーナ取付
二、實驗臺　バランス室机置臺は床迄煉瓦積上け給水排水及び受水槽其他の瓦斯バーナー取付け、
三、倉庫及藥局　戶棚藥品及び器具入れ棚に取付ける貸出し口手洗椅子等の設備、
四、揮發物室、臭瓦斯室　流し臺には亞鉛板張り流し口瓦斯バーナー給水ガラン付木造實驗臺等を設置、
五、渡り廊下　手洗場一ケ所設備、
六、給水　校內機械科「タンク」より鐵管を以て各室に給水、
七、排水　內部階下は土管階上鐵管使用外部は雨水共通式とし處々に煉瓦積溜桝を設

置連絡、
八、室内換氣　天井下端窓迫持間に於て煉瓦小口一本取拔き、
九、ドラフトチャンバー　階上階下共に四ヶ所煙突を設備して排氣、
十、受付給仕室　瓦斯臺流し、手洗ひ、帽子掛け、机椅子設置、
十一、教授室、主任室、助教授室　机本棚、椅子、衝立、設置、
十二、戸棚　實驗室、教授室、主任室、研究室藥局、圖書室、標本室、助教授室等に設置、
十三、圖書室　閲覽用机、腰掛、助手用机、本棚、椅子、設置、
十四、講義室　黑板、教壇、教卓、椅子、學生用机、腰掛、設置、
十五、寫眞室　流し設置、窓赤黄兩色「ガラス」上げ下げ障子嵌め込み、
十六、暖房　實驗室、研究室、主任室、教授室、助教授室、助手室、圖書室、藥局に設置す、
以上

（臨時建築課報告）

●商科委員任命　十一月十三日午後零時恩賜館會議室に於いて理事、商科科長臨席の上、商科委員規程に依り、左の委員を任命し、平沼代表理事より右辭令書を交附し、一場の訓示ありたり。

大學部商科委員

第一學年　第二學年　第三學年

A組横田　良治　A組高月　兵吉　A組大館喜久男
同　水野　憲次　同　尾形　實　同　市原　俊雄
同　上野　壽　同　江本　多助　同　松岡　正一
B組横田　茂　B組大森　義一　B組川島　剛一
同　更井　秀男　同　檜岡　太郎　同　田島　孝一
B組木原　信和　B組光瀬　正一　B組北條清三郎
C組山田　三郎　C組伊部　唯一　C組岡村　勇二
同　野田　大造　同　高田　秀正　同　藤井　仙吉
同　田原　龜市　同　坂間幸一郎　同　土井　眞徹
D組小早川源吾　D組長谷川安兵衛　D組白瀬庄三郎
同　下野　吾一　同　遠藤　智　同　久保田德爾
同　鈴木金之介　同　市村　勝久　同　立花　盛枝
E組佐藤　良作　E組中岡　實
同　古郡　新平　同　北川武三郎
同　笹村　幸雄　同　西村　晴雄
F組青柳　愛輔
同　大倉　博太
同　齋藤　勉

●體育部各部委員任命

體育部各部委員は理事、各當該部長、幹事、學生課主任臨席の上任命、平沼代表理事より各辭令書を交附せられ、後ち各一場の訓辭ありたり。

▲柔道部　十一月十六日任命。

委員氏名

商、三、D組　横内忠三
商、二、E組　居藤高季
同　大石榮一
商、一、F組　庄司彦男
專、政、二年　中島　衛
大、政、一年　高廣三郎

▲角力部　十一月十九日任命。

委員氏名

專、法、三年　宮崎米藏
商、二年　西本薫喜
商、一年　番場貞三

▲競走部　十一月十九日任命。

委員氏名

商、三、D組　小川　猛
商、二、D組　鈴木六郎
專、政、三年　井上松雄

▲短艇部　十一月十六日任命。

委員氏名

英、法、三年　田沼武兵
英、文、三年　坂本義男
商、三年　岩根英一
機械、三年　上野資鎮
專、政、三年　大井派太郎
專、政、一年　近藤靜彦

▲弓術部　十一月十九日任命。

委員氏名

專、政、三年　古川八郎

▲水泳部　十一月十九日任命。

委員氏名

商、三、B組　小坂勝藏
同　A組　大館喜久雄
商、一、B組　二宮知定

▲野球部　十一月十九日任命。

委員氏名

商、二、B組　花井昌三
商、三、C組　岸一郎

▲庭球部　十一月十九日任命。

委員氏名

專、政、三年　森　肇
大、政、三年　西田五一郎
同　上　佐藤久隆

●朝鮮留學生に賞金授與　十一月十七日午後一時より本部應接室に於て、各理事、學科科長及朝鮮留學生監督荒木捨作氏臨席の上、朝鮮留學生一同を參列せしめ、左記四名に對し其學業優等品行方正を褒賞するの目的を以て朝鮮總督府よりの依囑に依る賞金授與式を擧げたるが、平沼代表理事より賞金及辭令書を各學生に交附せられ、後ち一場の訓示あり。式後茶菓を饗し、二時半散會せり。

受賞者氏名

大正六年度大學部文學科哲學科卒業生　崔　斗善
同上二年　李　光洙
同上史學及社會學科三學年　玄　相允
同上英文學科三學年　金　輿濟

●早稲田工手學校の修學旅行　十一月三日午前五時二十分上野發列車にて、採鑛冶金科第四、五學期生二十四名は足尾銅山に見學旅行す。當日坑内を見學し、翌日午前中坑外の諸設備を見學したる後ち、正午大雨を冒して中禪寺に至り一泊。五日は地質見學の上日光に至り、日光廟を拜し午後五時十五分日光發列車にて歸京せり。

面影

校友…少壯實業家
原安三郎氏

明治四十二年大學部商科を首席で卒業せられた後ち直に實業界に踏み入り、犀利な手腕を諸會社の整

理の事に揮ひ、之れが爲に起死回生の運に向ひたる實業會社も少くないと唱はれ、斯界少壯敏腕の稱あり、多大の囑望を以て期待せられ居る校友原安三郎氏を紹介せんと、例の御高話拜聽の爲青山南町の同氏邸を訪ひ、刺を通ずれば、早速此方へと案内せられたは書齋兼應接室と見ゆる二階の一室であつた。室は廣くはないが、整然たる室内の氣分は整理家たる主人の人柄を偲ばせた。して、深綠色に塗られた壁、これに相應はしいカーテンの色、備へられた器具裝飾共に似つかはしい調和を保つて、如何にも落付いた居心地はその特色と思はれた。試みにカーテンを排して硝子越しに眼を放てば、幾萬坪とも知れない靜寂な青山の墓地を瞰下すのであつた。哲學者が冥想に耽りさうな、詩人が想像の翼を擴げ居りさうな、此の室から、紛糾解決の整理案、企業計畫の實籌確策が湧き出るのかとゆかしい感じに打たれた。斯んな思ひに耽つてゐるうち、ヤァ―お待たせしましたと、元氣よく這入つて來られたは主人原氏であつた。乃ち來意を陳べ左のお話を承つて辭去した。

○實業會社の整理と云へば、何れ快刀亂麻を斷つべき紛糾した事情もあらうし、又救濟を要すべき缺陷もあらうと云ふ譯で、隨分困難な厄介なものであらうと思はれますが？

「イヤ側で思ふ樣な事でもない。と云ふのは、不幸つたとか、紛擾が起つたとか云ふ其基く所點缺陷と云ふ者は、其の部内の者には却つり惡い者で、全く利害關係の無い局外から飛ゝで行くと、案外別り易い者である。だから理に着手したならば、一氣呵成に奮勵努力其の缺陷弱點を摑み、之を摑んだ以上、其氣分に染まざるうち、全權掌握を以て之を事が必要である。處が、此弱點缺陷を見はさほど困難でないが、之を見出した解決救濟の處決斷行が六ヶ敷しいのでつて馬鹿を斬られねばならぬこともあり、又思はぬ恨みを買ふことも覺語せねばならぬのである。併し、整理が甘く片付き、解決其の所を得て、倒れかかつた會社を起し、死にかゝた事業を復活せしめ得るその愉快は、また他の味ひ得ざる處であつて、優に男兒の快心事となすに足る事と信じて居る。

○近頃漸く戰後の經濟と云ふ聲が高まつて來た樣であるが、將來日本の經濟上最も望みを屬すべきは何でありませうか。

□何れ將來は日本も工業國たらざるを得ない事になるであらうが、その工業國たるに於て最も有望なるは鑛業であらうと思はるゝ。從來鑛業と云へば礦業と云ふ。何となく山師的な投機的な事業の樣に思はれて居つたが、決して山師的なことでもなければ、投機的な事業でもない。確實な事業である。と云ふのは、近來理工科學の進歩の爲、所謂鑛山技師の技倆も精確となり、又ビジネス眼も精密になつて來たから、今までの樣に危險性を帶びた事業ではなくなつたのである。而して我日本には銅と云ひ石炭と云ひ、其他の鑛、礦物に富んで居ることは決して失望すべきでない。是れまでに開拓發掘せられ居るは ホンの皮相外層に止まつて、其内層深層には一向手が着けられて居ないと言つて宜からうと思はるる位、未だ發掘開拓せられない鑛礦物がある。彼の最も貧しいと言はれて居る鐵鑛でさへ、若し獨逸の樣に科學の力を以て其の足らざる鑛質を補ひ得るとせば、是れ又決して望みのない 鑛業ではなからうと思はるのである。兎に角將來日本に於ける有望な工業は鑛、礦業であらうと思はるゝのである。

○船舶業にも御關係の樣に承はつて 居りますが兎角の評のある彼の船舶管理令に 就いての御考は……

□今は詳細に渉る批評を避けることにして、大體に於て失敗、少くとも有效な者では無からう。何せかと云へば、政府より此の法令を發布した或る目的は達せられないで（或る目的の明言は暫く預るとして）却ていろ〳〵不利を船舶業者に與ふる結果となり、當局も之れを骨拔きにしようと焦心して居るとか云ふ笑止な話も 聞いて居る位であるから、何れ成功沙汰でない事は極まつて居る。是れに付けても遺憾に思はるゝ事は、我が官民の間兎角意志の疏通を見ることが出來ないで、政府當局者は民間實業界の眞相に通ぜず、民間實業家は政府當局の爲政に冷淡であると云ふ有樣で、政府は政府、民間は民間と別々な道を歩んで居る樣な姿であるから、折角爲めになれかしとの爲政も實際は何等の利益を與へず、時に反つて不利益を釀すと云ふ結果となると云ふ事である。戰後世界の平和的戰爭に對應し之れと 競爭せざるを得ない場合に斯んな事では實に心細い話であるから、何としても此の弊風を打破して、官民一致以て世界の競爭に當る樣にせねばならぬ事と思ふ。

校友會報

◉臨時校友幹事會

十一月廿五日正午早稲田倶樂部に於いて臨時校友幹事會を開き、渡邊亨、宮川鐵次郎、大橋誠一、森盛一郎、磯邊愉一郎、鈴木佐平次、田中小太郎、齋藤義一、前田多藏、川口潔各幹事出席。左の事項を協議決定の上散會せり。

協議決定事項

一、臨時全國校友大會開催の件（園遊會）

大隈侯爵を始め御一族を招待すること

日　時　十二月十六日（日曜）

會　場　芝紅葉館

會　費　金一圓

一、費用支出の件

校友會より金千五百圓を支出すること（參照）母校よりも金千圓の寄附を仰ぐこと

一、準備委員の件

校友會幹事及在京評議員全部準備委員たること

尙校友會幹事、評議員中より各五名の專任準備委員を擧げ教授側よりも各科一名の專任準備委員を出すこと

右專任委員は會長の指名に一任すること

一、大隈侯爵へ紀念品贈呈の件

校友全體より應分の醵出を爲し大隈侯爵へ紀念品を贈呈すること

右醵出の募集は來春早々實行に着手すること

紀念品の選定は母校へ一任すること

一、校友會事務囑託の件

一、倶樂部名稱變更の件

◉臨時全國校友大會

今春の校友幹事會に於て秋季に至り本大學三十五年紀念祭舉行の時を期し、侯爵大隈總長八十の高齡に達せられ、曩に畏くも天盃並に鳩杖を拜受せられたる光榮を祝し、同時

品贈呈の事を決議し置る處、去る八月中圖らず侯長御重患の爲め、三十五祀典も擧行の場合に至ら從つて右決議の實行も延し居りしが、其の後幸にし重患平癒、元氣も舊に倍る御回復を見るに至りたれは、前項の如く十一月廿五日臨時校友會幹事會を開き、協議の結果、臨時全國校友大會開催の事となり、在京評議員並に校友會幹事全部之れが準備委員たる事に決し、評議員、校友會幹事、及教授中より右に關する專任委員を選び、種々協議を重ねたる末、來十六日午前十時芝公園紅葉館に總長侯爵、侯爵夫人及御家族一同を招待して祝賀式擧行の事に決し、本月四日午前十時平沼校友會長、松平評議員會長と俱に此の意を齎して侯爵邸に詣りたる處、侯爵卽ち喜んで之を快諾せられたり。仍て專任委員は夫れ〳〵分擔を定めて目下開會準備に熱心しつゝあり。

◉辰政倶樂部祝賀會兼十一月例會　十一月十四日午後六時內幸町早稲田倶樂部樓上に開會。今回會員米山勳氏が一年志願兵として豐橋聯隊に入營せらるゝ事となり、又德永眞鑑氏が古河合名會社に入社せられたるを以て十一月例會を兼ね兩氏の祝賀會を催せり。先づ幹事太田守男氏起て慶賀の辭を述べ後ち兩主賓の叮嚀なる謝辭ありて次に祝宴に移り、主客歡を竭して午後十時散會したるが、當夜の出席者左の如し。

德永眞鑑　米山勳　岡田稔
尾立維昌　長尾清一郎　田中啓次郎
楠瀨壽　太田守男

因に這度本倶樂部事務所を北豐島郡瀧野川、田端五二七太田守男氏方に設置仕り候間、通信其他一切の要事は同所宛願ひ上げ候（幹事敬白）

◉芙蓉會第三回懇親會　三井各會社勤務者校友より成る芙蓉會は其第二回懇親會を去る七月前回と同じ神樂坂、「末よし」にて開催したるが、更に今回三井合名會社員高木隆吉氏が三井銀行橫濱支店に榮轉せられたるに付同氏送別を兼ね第三回懇親會を例に依り「末よし」にて十月二十五日夜開催したり。當日は生憎午後より暴風雨となりしにも拘らず、左記の人々出席せられ、一夕の歡を盡したり。尚會員諸兄との連絡を計るため本年三井諸會社東京本店に入社せられたる校友は幹事の一人三井鑛山會者祕書課內藤澤久宛にて姓名及び勤め先を御一報せられんことを望む。

十月二十五日出席者（順不同）（藤澤久報）

◉高木隆吉（三井銀行橫濱支店）◉高木眞木彥（元物產）◉瀨下源三郎（物產）◉貴虎孟太郎（物產）◉吳仙壽（物產）◉今橋稔一（物產）◉峰須賀武彥（物產）◉宮島文藏（銀行）◉清水慶之助（銀行）◉石川洗（銀行）◉藤澤久（鑛山）

◉大阪早速會　浪速銀行本店及附近支店に勤務せる早稲田關係者より成る本會は、十一月三日午後五時天長節の佳辰を卜し、大阪府住吉公園內廣田屋に秋季例會を開催せり。會員十六名の內十三名の出席を得、宴を開き各自の隱藝もあり。左の事項を決議し一同紀念撮影をなせり。

決議事項

一　東京に東京早速會生まれたるに付大阪の方を大阪早速會と改稱すること
二　東阪彼我の聯絡を圖る爲め例會其他事故を互に通信する事
三　今回撮影の寫眞は母校と東京早速會とに送附すること
四　次回の當番幹事左の通り選任すること
三森芳男君（再任）
中村元治郎君（新任）

出席會員

伊集院勝吉君（堺）　野元岳君（西）　海津豐君（神）　串本友三郎君（本）　遠田孝三君（本）　小西次郎君（本）　河邊秀君（難）　川村寅君（難）　加納義之君（北）　永井廉夫君（神）　中村元治郎君（北）　野津鎭意君（本）　三森芳男君（本）

大阪早速會

◉水戸臨時校友會　水戸校友會にては、縣會開會し、校友議員の出水中なるを機とし、十一月十九日午後六時より市內南三ノ丸環翠亭に於て臨時小集を催したり。出席會員左記十

四名にて、富谷祐次氏開會の挨拶を述べ、之に對し校友議員小田部藤一郎氏の挨拶あり。各自胸襟を開き在校時代の舊に返りて十二分の歡を盡し、十時過ぎに至りて漸く散會となれり。出席諸氏左の如し。

●小田部藤一郎●市村貞造（以上縣會議員）●本多文雄●高谷祐次●江戸文（以上いばらき新聞社）●田沼富三郎（茨城青年社長）●中村幡雄●小林德次郎（以上銀行員）●河村敏●鬼澤三重郎（以上日立鑛山）●小泉潤一郎（官吏）●渡邊惣右衛門（實業家）●小野村幸二（公證人）●直村達也（電氣會社技師）

●長崎校友會の大隈維持員一行歡迎會　去る十一月十九日朝鮮支那巡遊を終へ、上海より長崎に着かれし母校維持員大隈信常氏始め校友にして憲政會代議士たる賴母木桂吉、關和知、櫻井兵五郎三氏並に金澤商業會議所會頭横山章氏同書記長原文次郎氏等一行の爲めに、長崎縣校友會は商業會議所聯合の下に市内小島町西洋料亭富久屋に於て、同日午後六時より歡迎會を開けり。來會者數十名に達し、一同席定まるや、商業會議所副會頭澤山精八郎氏の挨拶に次き、校友を代表して評議員小川寅六氏の歡迎辭あり。之れに對し、大隈信常氏並に横山章氏の謝辭あり。軈て宴酣なる頃、澤山氏の發聲にて大隈氏一行の萬歳を三唱し、乾盃を爲し、九時過和氣靄々裡に散會せるが、校友一同は別室に居殘り、幹事松尾榮三郎氏より會計報告ありし後評議員並に幹事の改選を行ひ、評議員は小川寅六氏に重任を乞ふに決し其承諾を得。幹事改選に就ては種々討議の末、詮衡委員の指名を小川氏に一任し、委員の選定に俟つ事に決し、十時半頃散會せり。尚當夜校友の出席は左の諸氏。

小川　寅六　中津海知幾　田代　泰一
森　七郎　二鳥菊次郎　田中　直二
中村賢之助　永井　本六　松尾榮三郎
毛利　茂　松尾　長市　永見泰四郎
森川　太吉　吉原　武嗣　大澤　梅吉
原田　豐一　渡邊熊太郎　鳥谷　徹介
德永　喜一　山野邊幸家　佐保　畢雄
森　卓郎　谷口　良三　本田　親宗

●上海校友會　元母校教授校友永井柳太郎氏南洋視察の途次寄港ありたるを以て、十月廿五日午後七時より支那料理店一品香に同氏の歡迎會を開く。清水氏の歡迎辭にて宴を開き、永井氏の謝辭あり。老酒の杯を飛しつゝ歡談に時を移すこと四時間。終りて母校の萬歳を三唱し十一時過散會。尚當日は偶然來港ありたる北川龜三郎氏をも同時に招待し得たり。當日の出席諸氏左の如し。

八田　喜三（三菱）　中村　磯（服部）
小出　富治（三井）　中島　玉郎（三井）
雲雀　與太郎（大倉）　鷄原梅次郎（日本棉花）
西澤　武雄（江商）　中村　誠二郎（三井）
大串　爲八（警察署）　森　茂（同文書院）
井上　豪介（滿鐵）　清水　洳平（增田）
小林　重平（增田）　宇賀　龍雄（增田）
田中　淳一（增田）　須永　俊三（日清）

●北京に於ける同學會

北京に在る支那校友は大隈信常氏の來燕を期とし其歡迎の意を含み十一月一日午後七時を以て中央公園今雨軒に秋季大會を開催せり。支那側にては司法總長林長民、交通總長曹汝霖、江庸江天鐸の兩次長、陸宗輿、李士偉、劉崇傑の諸氏合せて六十餘名出席せり。林司法總長主人側を代表して演說して曰く、大隈老侯夙に十年以前に於て支那留學生を培養し以て日支親善の基礎となせり。吾人當時の情況を回顧して誠に追憶の情に堪へず。茲に同人相謀り老侯の爲めに乾盃すと、大隈信常氏立ちて答辭を述べ主客暢談、十時半に至つて始めて散ぜり。（支那新聞より譯載す青柳生）

●校友有住庄之助君逝く。三井物產會社天津支店勤務有住庄之助君は去る十二月二日午後五時半當地共立病院に於て長逝したり。故人は茲年七月學園を去り、夙に志を大陸に抱き、三井物產會社に就職し、七月下旬自ら進んで支那に渡り、當地支店に勤務す。爾來三閱月、よく内外に信望を得て大いに囑目せられたりしに、去る十月廿二日、忽焉病の冒す所となりて當地共立病院に入れり。病症はアミーバ赤痢にして、故人自らすら最後に至るまで極めて樂觀したる程にて、計らざりき今日幽明境を異にせんとは。十一月二日午後病勢頓に改り、悲しい哉遂焉不歸の客となる。生を世に享くる廿三歳、故國をはなれ骨肉に別れ、異域關外の夜更けて、靜かに眠るが如き遺骸を見る者誰かその無常迅速に慟哭せざらんや。その夜は先輩僚友相集りて通夜をなす。折しも北支那一帶を浸せる大洪水は、天津府の市街郊墟を海と化し、翌朝八時、白木の棺は小舟に搭ぜられたるまゝ、府の南郊遙かに漫々たる水上僅かに殘る火葬場を指して哀しき野邊送りをなしたり。翌四日、朝は氷の中に冷たき白骨を收めて、その日の午後三時三井物產會社にて葬儀を終れり。異常の際のことなれば、さゝやかなる葬場は菊花を以て蔽はれ、同胞數十名相集ひて故人の爲にその英靈を弔ひたり。（天津早稲田校友會幹事報告）

●早稲田倶樂部の移轉

從來麴町區内幸町に置かれたる早稲田倶樂部は、今回同區永樂町に新築落成したる日清生命保險株式會社第三階全部を借り受け十一月廿六日之れに移轉したるが、其の坪數は貳百七拾三坪七合一勺にして、其平面圖左の如し。

●校友動靜

校友諸氏の動靜左の如し。

●高柳博次（四三大政）　國民新聞社經濟部長
●井上留治郎（三一政）　領事補に任ぜられ香港在勤を命ぜらる
●菊池寛之（5大政）　東京日々新聞記者に轉ず（神田區錦町三ノ一〇山下方）
●岩崎平造（3大政）　南滿洲鐵道株式會社販賣課勤務（大連市近江町A區六ノ十號）
●番場吉二（3大政）　横濱市元濱町二ノ一七東京

通關合資會社横濱出張所勤務（同市宮崎町三八船越方）

●鬼頭喜三郎（6政）　南滿洲鐵道株式會社地方部地方課勤務（大連市北大山通八番地二號）

●田中信彦（3政）　東洋經濟新報社に入る（牛込余丁町一〇九）

●池田可夫（四三政）　保坂鐵工所を辭し府下千駄谷町字原宿二三〇に居住

●中村　明（四一大政）　大阪市北區堂島濱通一丁目に於いて東洋油脂工業株式會社を創立す（兵庫縣尼崎市西見立一番地）

●小川泉四郎（6大政）　京橋區合資會社倉田商店主事（小石川區小日向臺町二ノ二九）

●花守　赳（6政）　村井重役秘書役（市外下澁谷七五五村井邸内）

●皆川　巖（四三大政）　京橋區南傳馬町二ノ九柏商會主となる（牛込區矢來町三〇）

●高野清八郎（四五政）　支那山東省青島青島新聞社に入る（同社内）

●永井本六（二五政）　長崎稅務署長に補せらる

●岡　好友（4大政）　名古屋市明治銀行に轉勤

●吉田三平（三八大法）　米國桑港三井物産勤務（c/o Mitsui & Co., Room No. 335—36—38—40, Merchants Exchange Building, 431, California St., San francisco, U.S.A.）

●柳井行雄（6法）　麹町區有樂町一ノ一富士生命保險株式會社（牛込區早稲田町二七）

●岸井　保（6法）　東洋拓殖會社京城支店に入る

●坂本玉一（5大文）　日本橋區本銀町三ノ二株式會社啓成社勤務

●大西通幸（三八文）　山梨縣立日川中學校教諭（奏任官待遇）に任せらる

●吉村鷹夫（四四大商）　淺草區藏前森田町永峰セルロイド工業會社貿易課課長に就任

●東　履吉（4大商）　大阪山口銀行に轉勤（大阪市東區小橋西ノ町同行々舍内）

●武林專一（4大商）　日本橋南詰村井本店勤務（牛込區市ヶ谷谷町五五）

●田中福之助（四三大商）　株式會社福澤農場取締役、東海染色株式會社監査役（京橋區新船松町十）

●高見與一郎（2大商）　上海日本郵船會社に轉勤

●宇佐美占太郎（6大商）　明治製糖株式會社臺灣本社勤務（臺南廳蘆荳庄）

●江崎秀雄（四一大商）　日本火藥製造株式會社社員となる（京橋區南小田原町四ノ六）

●石垣猪之吉（四五大商）　横濱市本町四丁目增田合名會社雜貨部に轉勤

●風間德太郎（四五大商）　日本木管株式會社近文工場工務主任となる（北海道石狩國旭川區同社社宅内）

●稻光謙三（4大商）　丸の内三菱二十號館旭電化工業株式會社に轉勤（市外中澁谷字田川八五〇）

●荊木誠三（四四大商）　京橋區新肴町三、株式會社碌々商店に入る

●高木獻吉（4大商）　廣島縣竹原港弘益殖産株式會社製鹽所經理課長

●河崎外次郎（四四大商）　支那漢口大倉洋行勤務

●平木太市（4大商）　支那漢口英租界黄泰洋行に勤務

●近藤　節（6大商）　三菱合資會社勤務（下谷上野櫻木町四五宮田方）

●高橋春一（6大商）　大阪市櫻島町株式會社大阪鐵工所會計課勤務

●栗栖末人（4大商）　大阪商船株式會社横濱支店勤務（横濱市三春町一の二山本方）

●菅野留吉（四四大商）　神戸市元町三丁目大正海運合資會社勤務

●清水光義（4大商）　南滿洲鐵道株式會社地方課勤務（大連市近江町A區三ノ九）

●谷山國守（5大商）　留學の爲め米國に渡航（Belmont School, Belmont (al., U. S. A.)

●須田孝壽（5大商）　上海茂木洋行勤務（上海田岡洋行内）

●原　忠宗（5大商）　增田合名會社新嘉坡支店に轉勤

●中島　復（6大商）　横濱正金銀行長崎支店勤務

●山田麟之助（6大商）　福岡市土居町十番地ノ一三井銀行支店勤務（同支店内）

●鹿田秀夫（6大商）　熊本縣八代郡鏡町日本窒素肥料株式會社鏡工場勤務（同町二〇番地緒方安太郎方）

●近藤貴德（四五大商）　愛媛縣新居郡大保木村龍王鑛山鑛業所勤務

●川邊儀助（5大商）　岡山石炭株式會社專務取締役に就任（岡山市小橋町中屋敷四六）

●湯淺　泉（四〇大商）　日本橋區第一銀行伊勢町支店勤務

●增田彦太郎（3大商）　大阪市高麗橋一丁目愛國生命保險大阪支社に轉勤

●本橋儀三郎（5大商）　支那營口新市街東亞煙草營口製造所に轉勤（同所内）

●大峰光彌（2大商）　長崎縣南高來郡湊町二三、日本澱粉株式會社有明工場勤務（同工場内）

●寺田定治（5大商）　大阪府河内郡住道村東洋白煉瓦株式會社工場に勤務

●鍋田良之輔（四三大商）　麹町區八重洲町古河合名會社本店に轉勤（市外澁谷町上澁谷一三五番地ノ三）

●大泉　一（5理工）　南滿洲鐵道株式會社技術局建築課勤務（大連市北大山通八番地一號館内）

●鈴木新吉（4理工）　府下龜戸町久原鑛業株式會社佃島製作所勤務（牛込區市谷仲ノ町四一番地宇佐美方）

●畑中與七郎（3理工）　福岡縣遠賀郡香月村貝島鑛業株式會社大辻鑛業所機械事務所に轉勤

●木本守治（5理工）　鹿兒島紡績株式會社東京出張所に轉勤

●瀧澤敬也（5理工）　新潟縣中蒲原郡五泉町新潟水力電氣會社變電所に轉勤

●金子　武（5理工）　東京砲兵工廠技術課營造掛設計部に轉勤（芝區高輪臺町二六）

●杉浦美佐雄（6理工）　福島縣耶麻郡盤梯村猪苗代水力電氣株式會社電氣課磐梯出張所に轉勤

●松本幾太（5理工）　大阪市東區北濱二丁目久原鐵工事務所に轉勤

●清住義麿（6理工）　吳海軍工廠水雷部勤務（吳市郷町一六〇）

●藤井新一（6英）　米國渡航スタンフォード大學に入學す

●太田　旭（3國）　京都同志社圖書館勤務（京都市上京區相國寺門前町田井方）

●堀　孫市（3英）　富山縣高岡市立商業學校に轉任す

●荻原芳政（三八歴）　山梨縣立中學校教諭に轉任

●鶴田雄夫（4國）　專修實業學校講師となる

●小松稻雄（四二國）　岐阜中學校に轉任

●尾崎三郎（6國）　栃木縣立眞岡中學校教諭

●仲西春吉（6國）　宮崎縣立宮崎中學校教諭

●眞田直輔（6國）　岡山縣立矢掛中學校教諭

●小倉　哲（6國）　富山縣立魚津中學校教諭

●土井　良（6國）　鹿兒島縣薩摩郡立實科高等女學校教諭

●島野金吾（四二推）合資會社櫻組調帶部勤務（府下東大久保四八）

◉轉居

校友諸氏の轉居左の如し。

●黑川九馬（評議員）　小石川區關口臺町一二

●小室靜夫（教授）　麻布町廣尾町七二

●田邊尙雄（講師）　府下下落合五四六
●吉田巳之助（教授）　牛込區余丁町一二〇
●岡田朝太郎（講師）　小石川區林町六六
●吉田享二（助教授）　市外淀橋町柏木九六一
●中山輔次郎（三五政）　牛込區早稲田町五二
●菊池彌三郎（5政）　赤坂區一ッ木町四六押田方
●岩井清永（6政）　牛込區早稲田鶴卷町三〇五
●石井新一（四〇政）　市外澁谷町中澁谷字宇田川九七六
●松井周次（6大政）　大阪市西區土佐堀通三丁目一四番地
●深澤政介（三九大政）　府下千駄ヶ谷町新屋敷七〇六
●金親　潔（5政）　橫濱市北方町四六七齋藤方
●荻野元太郎（三六英政）　府下西大久保百人町一
●板橋菊松（四一政）　朝鮮京城府南米倉町二三六
●永井清志（三九大政）　牛込區矢來町一一
●白南　薰（6大政）　神田區四小川町二ノ五朝鮮基督教青年會
●松田昇一（6大政）　廣島縣賀茂郡阿賀町
●山柴金吾（四四政）　本郷區駒込林町二三〇
●村越義衛（四五大政）　牛込區原町一ノ四九
●三浦弘一（3政）　府下下澁谷羽根澤二四一岡崎方（報知新聞記者）
●細　梅三郎（三六政）　山形縣稻岡町
●福永元彥（6法）　府下板橋町大字瀧野川二四三三伊藤方
●內田喜雄（5大法）　牛込區下戸塚町三二番地北村大太郎方
●庄田恪次郎（6大法）　牛込區東五軒町一六番地市橋方
●鈴木廣助（5法）　牛込區新小川町三ノ一三番地柳方
●安達熊一郎（四〇法）　市外巢鴨村一八三
●岩永重華（二三行）　朝鮮慶尙北道慶州邑
●山口藤次郎（三四行）　大阪市南區天王寺松ヶ鼻町五四七三
●內田民平（四〇大文）　市外巢鴨町字宮下一六八七番地
●佐藤　正（四二大文）　市外戸塚町諏訪九五
●西田眞三郎（6大文）　神田區五軒町一番地神島九三方
●濱田宗三郎（2大商）　京橋區新佃島東町一ノ五濱田造船所
●加藤茂正（2大商）　名古屋市東區手代町一三
●岡本　千（4大商）　栃木縣河內郡富屋村
●江田武彥（6大商）　門司市外大里町三五八三
●猿田春景（四五大商）　大坂市築港七條通り二ノ一一番地
●石川宰三郎（2大文）　本郷區湯島新花町六〇
●平林初之輔（6大文）　牛込區辨天町九八番地長尾正人方
●田中　純（4大文）　本郷臺町二一閑翠館內
●村松長治郎（四四大商）　岡山市西中山下四二
●朝重進一（4大商）　芝區三田四ノ三二朝日館內
●橋本彌吉郎（四三大商）　兵庫縣明石郡垂水村山田大谷別莊內
●唐澤熊雄（5大商）　麴町區飯田町三ノ五大閣館
●久保田　叶（3大商）　小石川區大塚窪町二〇（會社員）
●青木儋平（5理工）　府下大井町鮫洲六ノ一〇五吉本方
●福本文五郎（4國）　芝區琴平町二川島方
●藤山茂彥（6國）　牛込區早稲田鶴卷町二三番地樂城館
●平岡伴一（5英）　芝區汐留町二ノ一鐵道官舍內
●岡久　毅（四二歷）　德島市德島町北濱
●山中慶吉（三九英）　大阪市南區北桃谷町五六山崎幸祐方
●風井晋一（6國）　府下卽戸塚五七一改名館
●向井兼德（四三推）　深川區富吉町四

拜啓時下新寒相加り候處彌御淸勝賀上候陳者總長大隈侯爵閣下本年八十歲の高齡に躋らせられ曩に　天盃並に鳩杖を拜受せられ且秋初重患に罹られ候も速に御快復其元氣舊に倍するもの有之候は校友一同の慶賀に堪へさる處に御座候就ては來る十六日（日）午前十時芝紅葉館に於て臨時全國校友大會を開き侯爵同夫人並に御一族を招待して御祝賀申上度候間御繰合せ是非御出席被下度御案內申上候　拜具

追て準備の都合有之候間御來會の有無是非來る十三日迄に早稲田大學本部內庶務課宛御一報煩上候

大正六年十二月

早稲田大學校友會

全國校友各位

◎改姓名

校友諸氏改姓名左の如し。

●村井成次（5大商）　舊姓吉川
●深澤增吉（3大商）　舊姓奧屋（兵庫縣明石郡鹽屋）
●上木　審（4國）　舊名卽審（岡部出版合名會社編輯部主任、東京市立商業學校囑託、本郷區湯島四ノ三前島方）

學會會合

◎溫交會

會長大隈侯爵八十の高齡に達せられ、曩に畏くも　天盃を拜受せられ、且秋初以來の大患

明治四十四年　專門部法律科出身　入江　縫
明治三十六年　邦語行政科出身　山本　知士
大正二年　大學部商科出身　矢部　省三
明治四十一年　大學部商科出身　西角　政人
明治四十一年　大學部商科出身　西村　時彥

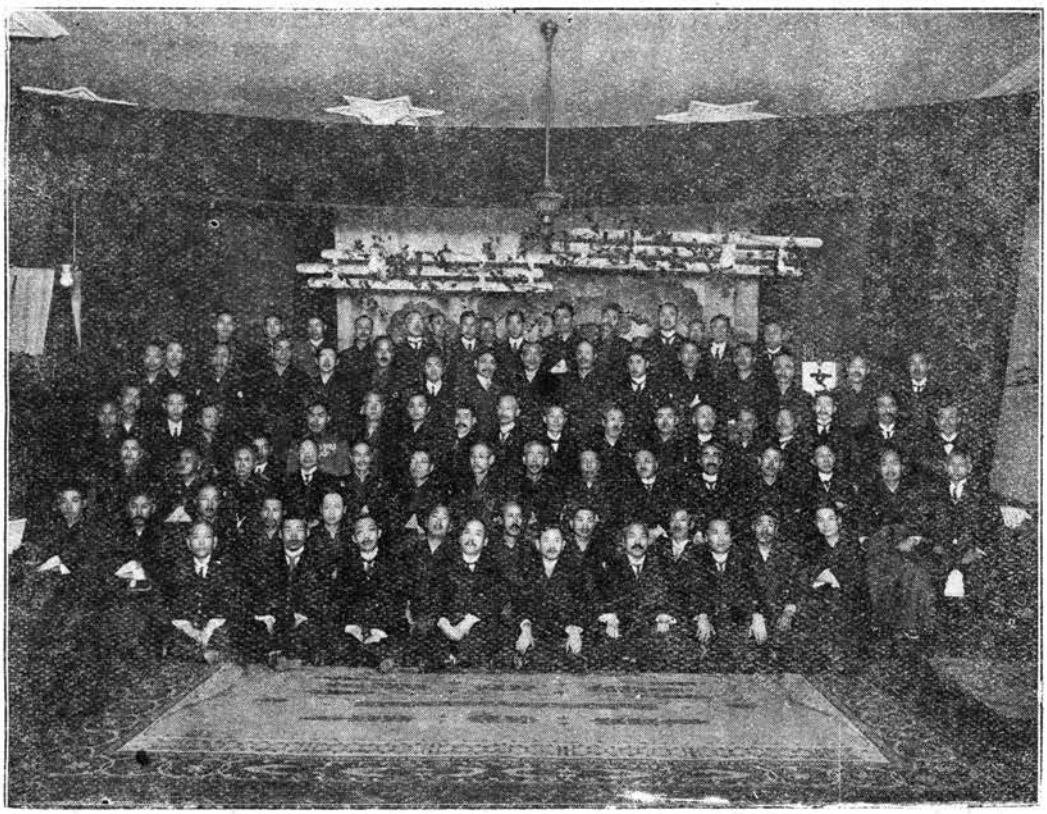
右諸氏の訃報に接し哀悼の至りに堪へず茲に謹んで弔意を表す

も恢復せられたるに付其の祝賀を兼ね本會晩餐會を十一月二十五日午後三時帝國ホテルに開催す。來會を待つ間の前餘興として肥田喜巳子の義太夫、藤間勘十郎社中の男舞、柳屋小さんの落語ありて衆の感興を惹き、やがて食堂を開き、歡談の間に晩餐を共にし、デザートコースに入るや、教授吉田良三氏幹事を代表して開會の辭を述べられ、『侯爵御大患の節發熱四十度に昇られたるが、斯かる高度の發熱は幼年者若くは壯年者に於いて見る所にして老年者に於いては稀れに見る所なり。然るに八十の高齢に達せられたる侯爵にして此の高度の發熱を見、而かも能く此の高度の發熱に堪へられ、漸次回復に向はれたるは實に驚歎する所なりとは當時主治醫の談なりと聞けるが、是れ取りも直ほさず侯爵の御健康壯者を凌ぐ者あるを證するに足る事にて、侯爵御自身の爲めは申すに及ばず、我が早稻田學園の爲め又天下國家の爲め慶賀の至りに堪へずと』祝意を表され、次いで平沼代表理事祝辭を述べて一同の乾盃を求め侯爵の壽を祝し、後ち侯爵の萬歳を唱ふ。終つて大隈侯爵滿堂の拍手に迎へられて挨拶ありたる後ち、『自分の壯者にあらざれば見ること稀れなりと云ふが如き高度の熱に堪へて幸にも回復を見るに至りたるは偏に心臓と胃腑との强健に賴る賜なりき』とて、人の生命には精神の强固與りて力あることは勿論なれども肉體の强健亦大に顧慮せざる可らざるを說かれ、更に進んで『恰も自分の病氣最中に起りたる我が早稻田學園の所謂早稻田騷動なる者は是れ謂はゞ學園の病氣なり。强健なりし我が早稻田學園が三十五年振りに發病したりと謂ふ可きなり。人間既に病氣に冒さるゝの事ありとすれば、學校の發病も亦時に止むを得ざる者あるべきか。要は速に之れを治癒せしむるにあり。然るに幸にして名醫あり、之れが治療に肝膽を碎かるゝあり。投藥大に效を奏して今や將に全癒の期に至らんとす。是れ大に慶賀すべきなり。自分は己れの病氣平癒にも增して我が學園の病氣回復を喜ぶなり。希くは一日も早く我が學園の病氣全快して其の元氣益々旺盛ならんことを』と結ばる。

斯くて食堂を閉ぢ、一同休憩室に入り歡談に時を移し、やがて散會。來會者教職員約三百名。盛會を極めたり。

◉前幹部招待有志會

過般の紛擾の爲に高田早苗氏、坪内雄藏氏、市島謙吉氏、田中唯一郎氏、坂本三郎氏の五先輩が幹部の要職を退きて今は本大學との關係の斷えたる事は嘗て報道せるが如し。本大學の有志事務員は五先輩を追慕するの情切なるものあるを以て、招待會を開きて多年の厚誼を謝せんとて寄り〳〵之を相談せしが、五先輩と共に幹部を退きたる鹽澤昌貞氏、田中穗積氏、浮田和民氏、金子馬治氏、中村進午氏、中島半次郎氏、增子喜一郎氏、安部磯雄氏、及び日清生命保險會社、日清印刷會社、本大學出版部當局者の贊成援助を求め、十一月廿九日午後五時、上野精養軒に招待會を開き、五先輩を正賓とし贊成者を陪賓となして一大盛宴を張りたり。當日の來會者凡て九十人、斯る會合には曾て前例を見ざるの盛會なりき。當日は餘興として肥田喜巳子の淨瑠璃、燕枝の落語ありて紀念撮影を爲し、午後六時半宴席を開きしが、デザートコースに入るや種村宗八氏は發起人中の年長者の故を以て發起人を代表して一場の挨拶を述べ、本日招待の正賓中、一人の不參者もなく萬事を差繰りて漏れ無く出席せられたる溫情の尋常一樣ならざるを深謝して其自愛健康を祈り「斯の如き會合に於て斯の如き大多數の事務員が一堂に集り五先輩の溫容に接し得るの機會は、曾て前例なきのみならず、近き將來に於ても容易に見るべからざるを以て此機會に於て。諸先輩の訓辭を賜はんことを望む」と述べて其挨拶を結べば、發起人中の川口潔氏は旅行先なる田中小太郎、岡安理平兩氏よりの祝電を朗讀せり。かくて高田博士は滿堂の喝采に迎へられて一場の挨拶を爲したる後「般鑑遠からず近く露西亞に在り。露國



上野精養軒に於ける前幹部招待有志會

人にして責めてもケレンスキー内閣を擁護したらんには、今日の如き悲慘の狀態には陷らざりしなるべし。フオルストベストを得ざるを憾みてセコンドベストをも失ふが如きは深く戒めざるべからず。今日の早稲田大學を救ふの道は他なし諸子が前幹部に盡されたる誠意と熱心とを以て現幹部を擁護すること是れなり。」とて、切こ當局者を助けて校務に盡瘁せんを望まれたり。高田博士に尋ぎて立たれたる坪内、市島、田中(唯)、坂本(三郎)、增子諸氏の演說終れば、小久江成一氏は發起人中の第二の年長者の故を以て、立ちて滿堂の乾盃を求め五先輩の爲に萬歲を三唱して宴を閉ぢ、別席に移りて閑談に時を移し九時散會せり。當日の來會諸氏左の如し。

○正賓

高田早苗氏　坪内雄藏氏　市島謙吉氏
田中唯一郎氏　坂本三郎氏

○陪賓

田中穗積氏　中村進午氏　中島半次郎氏
增子喜一郎氏

○出席者

池田龍一　渡邊八太郎　富山幸次郎
前田多藏　岩村理一郎　植野包吉
本田信敎　高橋協　中島茂樹
川村虎雄　今井恭吉　辻村得一
山田正　淺山富雄　京谷有敏
小林好夫　石川雅吉　駒澤秀策
遠藤八彌　早野七太郎　島庄一郎
神戸廸衞　安井眞十郎　萩本文海
土岐秀穎　松田三好　橋本秀雄
阪本隆昌　福島峰吉　石川石次郎
南晴耕　石原庄平　茂木剛三郎
高橋善吉　湯淺吉郎　石井藤五郎
坪内大造　藤本肅　富永清祐
育野佐吉郎　瀧澤治次　眞木實
片山利久　名川昌治　青柳篤恒
山本利喜雄　山田太一郎　土屋詮敎
石野元藏　井上元規　岸至
市野彌三郎　荒川信賢　岡本季三
青山幸吉　福島幸太郎　小野谷佐介
小柳善四郎　石井末三郎　田村知三郎
大坪信　橋本榮司　廣田喜三郎
田中基憲（次第不同）

○發起人

渡俊治　川口潔　種村宗八
高橋三郎　田井善道　中村芳雄
小久江成一　小林堅三　木村三郎
望月嘉三郎

◎早稲田美術研究會　十一月例會を廿四日(土)午後一時、戸塚町荒井山、美術研究所内にて開く。最初小川氏幹事就任の挨拶あり。次いで左の兩氏の講演ありたり。

南畫について　校友　町田歐三氏
批評の種々相　教授　紀淑雄氏

講演了りて後、紀教授、津田青楓氏を中心として會員相互の間に今秋の各種展覽會の作品に對する批評の交換あり。頗る賑かなりき。午後六時散會。

尙當日來會せられしは左の諸氏なり。（順序不同）

紀淑雄　津田青楓　若月作市
角取助治　森口多里　植村宋一
町田歐三　新庄健　陣内最勝
橋本初男　原田弘　中山龜一
駒井義視　宮田正之助　上村藤若
兼松眞二　種田清次郎　廣瀨松之助
牧野大誓　村瀨眞一　山田弘
村田榮太郎　鈴木四郎　相見襄次
大谷時三郎　小川敏也　工藤信
木村信二

此の外美術研究所研究生數名來會。

◎月曜會　十一月十三日午後三時、例會を恩賜館會議室に開く。關與三郎氏の「近代思想の三期」の講演あり。氏は先づ近代思想を

(一)革命思想の時期(一七八九—一八一五)
(二)個人主義の時期(一八一五—一八四八)
(三)國民主義の時期(一八四八—一九一七)

の三期に限定し、而してフランス革命の宣言自由平等友愛の意義より論を起し、夫々の各期に於ける推移發達を頗る明快に說明せられたり。講筵に參會するもの金子、中島兩先生をはじめ、五十嵐、中桐、煙山、原、定金、清水の諸君にして、紅茶を啜りながら討議に花を咲かし、やがて散會せり。

◎東洋會定時總會

東洋會にては創立二周年の記念日たる大正六年十月卅一日午後六時より早稲田倶樂部に於て第二回定時總會開會。田中會長を首め、井芹繼志、山森利一兩執行委員、京田武男、堀川直吉、國田孝一、鈴木謙、星野德太郎、吉永半平、太田守男、三浦弘一、武谷甚太郎、藤井仙吉、中村三之丞、越智義秀諸氏十五名出席、田中會長、會長席に着き開會を宣し、左記各項を協議決定し、午後七時閉會。直ちに倶樂部階上に於て懇親會を開き、大に食ひ、大に談じたる後、餘興に移り、會員各自奇拔なる隱藝を演じ、就中京田武男君最も振ひ、歡聲絕えず堂内に滿ち、和氣靄々裡に散會、時に午後十時。

●總會決定事項

大正六年度に於ける會務、基金竝に決算等に關し井芹執行委員より左の如く說明報告したり。

▲會務報告

(一)懸賞論文　早稲田大學々生に對する懸賞論文は『戰後に於ける日本の敎育』なる論題を以て、大正五年十一月早稲田大學々生控所並に早稲田學報同年十二月號以後數號に亘り、募集を發表し、大正六年三月卅一日を以て募集を締切りたり。應募者二十名に及ぶ、依て速かに審査を遂げ、其結果を公にするの豫定なりしも、偶々母校紛擾問題惹起の爲め、本會の推薦囑托したる審査委員諸氏の多くは、該問題に關係ありしを以て、已むを得ず本年度末迄審査を終了する能はざりしは大に遺憾とする所なり。然るに目下審査を急ぎつつあるが故に其結果の公表も遠からざるべしと思惟せらる。審査遲延に對し、應募者諸氏並に會員諸君の諒恕を乞ふ。

(二)雄辯會補助　本會の會則にも揭載するが如く、雄辯會を後援するの趣旨を以て、金貳拾圓を雄辯會に補助して辯論修養の資に供したり。

(三)武藏野旅行　會員對雄辯會員相互の親睦と心身の健全とを圖るの目的を以て、大正五年十一月五日雄辯會と聯合して武藏野旅行を決行す。此日天氣快晴、午前八時京王電車起點追分驛(新宿)に集合す、一行三十餘名。其内會員十六名あり。午前八時半追分驛を發し、飛田給驛下車、之れより徒步里餘にして午前十一時半府中町に抵る。同町青年會の懇篤なる歡待と、親切なる案内とにより各所の古跡を探り、武藏野の秋色を飽喫し、午後再び步して立川驛に出で乘車、日暮都門に入り解散。

(四)會員數　會員總數五十一名其内東京在住四十四名、大阪在住三名、海外在住四名(米國、布哇、新嘉坡、漢口各一名宛)

▲基金現況　大正五年十一月廿一日第一回基金報

告を早稲田學報誌上に發表してより本年度末迄に基金の申込を受けたる金額五百七拾五圓申込人員五名にして現在基金總額左の如く、申込人員總數六拾七名なり。

一金四千貳百六拾貳圓　基金申込總額

內譯

金參千貳拾七圓　拂込金額

金壹千貳百參拾五圓　未拂込金額

▲決算報告　大正六年度（自大正五年十一月一日至大正六年十一月廿一日）

決算報告左の如し

歳入之部

一金百貳拾七圓六拾八錢　歳入豫算額

內譯

金參拾七圓六拾八錢　大正五年度繰越金

金九拾圓　預金利子

但基金壹千八百圓の定期預金に對する壹ヶ年間の利子（年五分）

一金百六拾六圓參拾貳錢　收入濟歳入額

內譯

金參拾七圓六拾八錢　大正五年度繰越金

金四拾九圓五拾錢　預金利子

但基金壹千八百圓の定期預金に對する利子（年五分五厘）六ヶ月分（自大正五年五月廿五日至同年十一月廿五日）卽ち前期分）

金貳拾壹圓四拾七錢　預金利子

但基金七百七拾七圓の定期預金に對する利子（年五分五厘）六ヶ月分（自大正五年十二月十四日至大正六年五月十四日）卽ち後期分）

金五拾四圓九錢　預金利子

但基金壹千九百拾五圓の定期預金に對する利子（年五分五厘）六ヶ月分（自大正五年十二月廿五日至大正六年五月廿五日）卽ち後期分）

金參圓五拾八錢　郵便貯金利子

歳出之部

一金百貳拾七圓六拾八錢　歳出豫算額

內譯

金八拾圓　早大學生に對する懸賞論文費

金貳拾圓　雄辯會補助費

金貳拾七圓六拾八錢　基金募集費並雜費

一金百拾參圓九拾七錢　仕拂濟歳出額

內譯

金八拾圓　早大學生に對する懸賞論文費

但し支出の形式を採り執行委員に於て保管す

金貳拾圓　雄辯會補助費

金拾參圓九拾七錢　雜費

小譯

金貳圓七拾錢　第一回定時總會費

金七圓五拾錢　武藏野旅行補助費

金貳圓七拾八錢　通信費

金六拾九錢　卷紙、揭示並報告用紙墨汁及糊

金參拾錢　給仕慰勞菓子代

一金五拾貳圓參拾五錢　差引殘額（翌年度繰越金）

內譯

金拾參圓七拾壹錢　剩餘金

金參拾八圓六拾四錢　歳入增收金

會長は前記會務、基金及決算の各報告に就て滿場の承認を求めたるに異議なく全部報告通り承認したり。

▲豫算案　左記大正七年度歳入歳出豫算案を提出附議し、審議の結果滿場一致、原案通り可決確定したり。

歳入之部

一金貳百拾九圓參拾五錢　歳入總額

內譯

金五拾貳圓參拾五錢　大正六年度繰越金

金百六拾七圓　預金並貯金利子

但基金參千貳拾七圓の定期預金に對する壹ヶ年間の利子（年五分五厘）並預金利子の郵便貯金利子

歳出之部

一金貳百拾九圓參拾五錢　歳出總額

內譯

金五拾圓　講演會費

金五拾圓　雄辯會公開演說會補助費

金拾四圓　雄辯會懸賞演說會補助費

金參拾圓　旅行補助費

金六圓　懸賞論文費追加

金六拾九圓參拾五錢　基金募集費並雜費

▲新入會者　井芹繼志、山森利一兩君より推薦したる左記九氏の入會は滿場異議なく承認したり。

太田守男君、三浦弘一君、松井通君、中村三之丞君、荒木章君、田上友治君、藤井仙吉君、齋木政太郎君、越智義秀君

▲執行委員改選　執行委員任期滿了に付き改選の結果左の通り何れも重任せり。

永井柳太郎君、井芹繼志君、比佐昌平君、山森利一君、宮澤胤勇君、稻田直道君

學生會合

◎露語研究會成る

元來我學園は自由討究を以て夫の研究の生命としてゐる。此故に苟くも我學園學生の集まる處必らず自由討究の途は講ぜられてゐる。それは幾多の學會が盛に自主的研究をしてゐるので明かである。英、獨、佛、語會、支那協會さては廣告研究會等、數へ來れば殆と枚擧に遑ない位である。本會は敢て其の形骸を眞似るのではないが、その研究精神は我等の生命であらねばならぬ。

我研究會でも、會長に金子教授を推し、副會長には追つて露西亞から片上教授を迎へる心意である。又顧問として露語科教授昇、八杉、馬場諸氏を推してある。而して授業は戰爭の結果教科書皆無の爲め、初等科は未だ募集しないが、研究生は、現二年生大部分を以つて馬場先生の熱心な御指導を仰いで、懸命に勉めてゐる。Rと云ふ字を裏から讀んでyaと云つた時代を超へて、プーシキンやツルゲネーフを讀んでゐる。こうして先づ內容の充實を計つてゐる。（MT生）

本會設立趣意書

今次歐洲戰爭勃發するや日露の關係は恰も干戈相見えし昔日を忘れし如く愈々夫の親善の度を加へ來りたるは夙に世人の知る處に非ず哉、此の時に當り彼我の識者は或は近時邇に近親せる兩國の經濟的楔子を益々强固ならしめんと叫び是を以つて世界平和の楔子となす又學者は精緻なる解剖的研究をなしつゝあり。然りと雖も露國は其の彪大なる形態、特異の色彩、眞に不可解怪偉の國土なり。而かも我國に於いて彼の國情に通ずる者そも幾何ぞ。

渾圓球上六分の一を占むる大露西亞には英主彼得あり、杜翁の出て平和を世界に高唱せるあり。夫の國情と文學は研究の好材料、一世の要望する處にして今日は則ちその絶好機會なり、而して是れが研究の方法は露語研究にあるや論を俟たず、此處に於いて露語の研究は我が國文學を稗益すべく日露兩國の經濟的近接の狀は永く保持すべく以つて兩國の國富を增しなば夫の修交の敦厚なる亦期して待つべし。

昨年我早稻田大學にも露語科新設せらるゝや吾人は競ひて此れに入科す吾人の此れに沒頭するや眞に故あり、吾人の我學園に露語科あるを德とする眞に故あり矣。然れども未だ以て吾人の知識慾を充すに足らず則ち我が露語研究會の設立を冀望し止まざる所以なり。希くば江湖諸

彦吾人の意ある所を諒せられん事を。吾人は其の力ある贊助と熱心を要望して止まず。

◉早稲田ローマ字ひろめ會の創立

維新以來我國運の發展は日進月歩の勢であつて、其間我國民の費した努力は實に非常なものであつた。然るにも拘らず、未だ其進歩の遲れ勝ちで世界の文明國と覇を爭ふに餘りに貧弱であるのは何故であるか、是れ畢竟文字を學び之を使用することが困難な爲である。文字の爲に多くの時と力とを費すことは能率增進の原則に反する國家の一大損失である。若し我國が世界文明の上に第一位を占めんと欲するならば、國字の改良は急務中の急務である。而も漢字は之を學び使用することの困難不便なる點に於て、到底平易簡明にして諸ゆる音を表はすに適するローマ字と比較することは出來ない。況んやローマ字は、今後の人の必ず知らねばならない世界的文字である。茲に於てローマ字普及の運動は益々必要たらざるを得ないのである。斯の如き國家の重大問題が若し我々の時代に我々の運動に依りて解決せられ或は解決せらるべき原動力となることが出來たならば、それは只に歴史上に於て特筆すべき一大事實であるばかりではなく、之れに依つて日本の國運の發展及日本文明の進歩に益することは蓋し莫大なるものであると信ずるのである。我々が輿論に訴へ、ローマ字普及の運動をなす所以も亦茲に在るのである。我會は斯の如き信條に從つて、此の度新たに、從來より存在する早稲田ローマ字會とは何等の關係なく、ローマ字ひろめ會の支部として創立したのである。本會は創立後日尚淺きにも拘らず、熱心なる會員の努力により、會も日に增し盛になつて來たので、先づ發會式を兼ねて第一回の

▲講演會　を去る十一月十日午後一時より本科第二十教室に開いた。當日は野球の早明戰や他に二三の會もあつたが、熱心なる聽衆で滿場溢るゝ程の盛會であつた。

（一）經濟上より見たる漢字の損失　萬朝報編輯長　斯波貞吉氏

（二）教育の根本的改革　前慶大教授　向軍治氏

（三）所感　法學博士　添田壽一氏

（四）支那文明に代る希臘文明　明治學院教授　エッチ・エム・ランヤス氏

（五）新日本の文字　帝大文科大學長　上田萬年氏

先づ阿部幹事の開會の辭に次で、斯波貞吉氏は實際上より漢字の害を詳細に述べられ、ローマ字使用の急務を說かれた。次で向軍治氏は教育の缺陷より說き起し、國字の改良を力說された。次に添田博士はローマ字に對する希望を述べられ、右終つてランヤス氏は約一時間に亘り、支那文明及希臘文明の特質より說き、之が日本文明に及す影響より、日本の文字に言及され、結局今後の日本はローマ字を採用すべき事を警告された。最後に上田博士は歴史的に日本文明を批判せられ、更に歐州戰後の世界の大勢より日本の地位に說き及ぼされ、若し我國が今後世界の列强と覇を爭はんとするならば、どうしても日本固有の言葉を保存すると同時に、世界的文字であるローマ字を採用し、日本の文明を以つて世界を風靡する樣にしなくてはならん。斯くの如くば、只に日本を世界に紹介するばかりでなく、日本國運の發展に貢獻する事非常なものであると結ばれた。何れも皆有益な御講話で、聽衆も非常に感動した。斯くて多數の入會者を得て盛會裡に散會したのは五時半頃であつた。

▲茶話會　茶話會を兼ねて小會を十一月十五日午後二時より本科第卅教室に於て催ふした。席上向軍治氏の熱烈なる講話があつた。氏は獨特の熱辯を振つて教育の腐敗より說き起し、其の根本問題は漢字に在る事を約二時間半に亘り詳細に述べられ、ローマ字の採用が如何に今日の急務であるかを懇切に說かれた。滿場立錐の餘地なき盛會で、卽時入會者五十餘名を得た。之にて全會員百餘名に達するのである。然し我々は之で滿足するものではない。大にローマ字の氣運を高調し、早稲田學園ばかりでなく、進んでは社會に向つてもローマ字の輿論を起すべく努めて居るのである。

◉六機會成る

過去半年餘の間、何事につけてもN組は親睦で共同一致的でクラスを思ふ念慮が厚かつた。クラス會なるものも一夕の凡俗なる歡を享樂するを以て滿足はしてゐない。そこで大正六年に入學した機械科でふよしみを以て六機會なる名稱のもとに强固なるサークルが出來たのである。單に親睦をはかるばかりでなく、互ひに練磨し研究し、遂にはかのロッキー山も足下にふみにぢつて雄飛しようとて六機とこぢつけたのである。

▲第一回例會　十一月二十二日、矢來倶樂部で開會、學校の授業に出席してゐる者は殆んど全部出席したくらゐ盛大であつた。實に左の八十二名の來會者があつたのである。

氏家先生　渡先生　岡田龜之助
久住進　兒玉康一　幸野誠之助
石川操　板倉閏吉　佐々木久雄
田中基　山本倍夫　佐々木武夫
松原泉　丹羽成德　佐々木勝治
福田耕　西岡義也　小野寺喜吉
船尾忠　久野政一　小松原壽次
木村緣　森岡眞篤　伊賀崎基助
三村登　田代計輔　馬場重三郎
阪本安　清水善雄　山本彌三郎
橫山徹　松村幸次　曳田堅三郎
野村猛　松本浩二　加藤宇一郎
澁谷勇　星野永次　三宅文武郎
西島五　間庭秀治　野口寛志郎
桑田清　大宅義雄　飯田慶次郎
弓氣田進　紫藤正吉　稻田勇太郎
原信雄　長岡養三　佐々木孝之助
池保二　澤本孟彦　小川二郎
森喜誠　齋藤一雄　二宮三郎
林幸平　桶口俊夫　平野五郎
藤井誠一　角田義雄　鷲尾英郎
大橋數馬　安田晴雄　安藤彦次
平田重德　八幡俊隆　尾崎收二
山田義政　中垣一男　青島鮭雄
島川義平　岡部憲吉　龍口甚七
中根正一　藤本憲吉　刈谷忠篤
金子數衛　味香啓次　前田軍次
杉浦昌幸（順序不同）

氏家先生の御講話があり、渡先生からも、「クラス會にこんなに大勢出席者のあるのは珍らしい。」とのお褒めのお言葉を頂戴した。隱藝百出し、十二分の歡を盡し、「都の西北」を合

唱して四散したときは早稲田の街は深き沈默をつづけてゐた。（大正六年・一一・二四・稿・阪本安・報）

◉秋瀞會研究會成る

十一月十五日木曜日午後六時半より其第一回を大學部商科第一學年の讀書會を北澤教授宅に於て開會す。使用書はマクレガー著「產業の進化」なり。司會者（北澤先生）は左の諸問題を呈出され、自由討究に入る。

一、產業の進化とは何ぞ
一、產業の進化に及す二大要素とは何ぞ
一、マルサスの主張と我國の將來に就きて

皆よく談しよく論ず。研究終りて後ち會名、遠足會、使用書變更に就き議する所あり。左の如く決定す。

一、本會を秋瀞會と稱す
一、遠足は無期延期とす
一、使用書の選定は先生に一任す

蓋し秋瀞とは、本會が彼の大騷擾の治りて靜になれるの秋に初まれると、瀞は一見水の淀みて動かざるが如くなるも、然も其の末は急流となりて岩に激するの美を致すを採り、我等の未來を卜せるなり。

當日の出席者は北澤先生の外左の如し。（横田報）

井上　星野　岡田　岡崎　大森　田中
竹内　中上　上野　信國　山口　松崎
增永　藤沼　坂本　木下　水野　横田
高田

◉英語會消息

▲幹事改選　九月新學期開始に當り、幹事の任期滿了に付、其改選を行ひたる所、左の如く當選せり。

本科二年
速水　久彦　由上　尙三　坂間孝一郎
清水　滋

本科一年
山田　三郎　田邊　性治　高橋　力男

▲例會　新學期最初の集會を十月二十七日土曜日午後一時より大講堂に於て開催す。定刻伊知地教授の流暢なる英語開會の辭に始まり、會員五名のレシテーションありて後ち、アイグルハート氏、大東講師、アンブライト氏等の趣味深き有益なる演說ありて四時半閉會せり。

當日は午後二時より戸塚のグランドに於て早明野球試合の第一回戰擧行されたるにも拘はらず、來會者は約四百名以上ありたるは大に多とする處なり。本日講演者左の如し。

大東直太郎氏。E、T、アイグルハート氏。S、S、アンブライト氏。山田三郎、高田義雄、笹井衞、木原信和、新保秀太郎の諸氏。

▲親睦會　十月三十日神田今文に於て親睦會を開催す。本日午後六時半速水幹事開會の挨拶ありたる後ち、一同打解けて牛鍋を突きつゝ各自隱藝等に興を惹き、談笑の裡に時を移し、十二分の快を盡して十時過解散す。出席者左の如し。

高杉、伊知地、勝俣、ベニングハフ諸先生。藤澤久、笠木喜四郎、石井眞峯、末高信、越智、木村、諸先輩在校幹事會員三十八名。

◉交通科專攻部懇親會

大正六年十一月二日夕五時、交通科第一回懇親會は江戸川清風亭に開かれた。相憎の秋雨にも拘らず、出席者三十人、田中（穗積）先生も御出席下さる。劈頭白瀨君開會の辭に托し、懇親會なるものゝ決して不必要ならざるを說かる。續て、諸兄の自己紹介に移り、更に諸兄の過去に於ける又將來に於ける抱負等を順次相語る。此の裡に夕飯を終る。

斯くて、田中先生立たれ大要下の如き訓話ありたり。

諸君は幸に大正の聖代に生れ、今次大戰の結果日本は世界經濟界に乘出したと云ふ氣運に乘じて、近く實業界に出でんとするは、恰も順風に春の海を航するが如きもの、諸君は運命の寵兒である。之をしも寵兒と云はずして何を寵兒と云ふ事が出來よう。諸君の目出度初陣は五ヶ月の後に迫つたのである。而も諸君は成功者とならねばならない。然し成功の秘訣と云ふも是れ奇策に出るにあらず、エマーソンは「從來の歷史を繙くに、成功せる人は多く天才の人に非して、絕倫の精力家である」と云つた。實に至言で、成功は卽ち努力の問題である。精神の如何が成敗の因つて來る原因となるので、之を國家に就て考るも同じである。彼獨逸が今日の隆盛を現したのは、獨逸國民が精力集中主義を採つたからである。一寸した例が、獨逸人は日本に三年居れば、日本語で取引を爲る事が出來ると云ふ、かの支那に於いて、英、佛、和、白等の國を凌駕して、商威大に振つたのも此筆法で行つた結果である。獨逸では「卵を運ぶには一つの容器で運べ」と云つて居るし、グスターフエックシュタイン氏は「不具は獨逸人の特長なり」と云ふ。是れ卽ち一つのものに精力を集中する事を示す好箇の言であると思ふ。此最善の努力は安心立命の域を生む母である。此努力が地理的恩惠によりて大成功を收め得たのは獨逸であつたのである。

更に目を我國に轉ずれば、三千年の歷史に徵し、一番の成功者は家康である。彼が三百年の礎を定め得たのは、此の精力主義の賜物である。彼は精力の權化で、堅忍持久を以て彼の政策の根本とした。「人の一生は云云」の諺は確に彼のモットーであつたに違ひない。實業界に入る諸君は須く彼を模範とすべきである。抑々日本の實業は最近に於て、非常なる進步をしたとは云へ、他の殊に陸海軍等が後進反つて先輩に範を垂れて居るのから較べると實に實業の發達は遲々たるものである。是れは卽ち兩者其心掛を異にするより蓋し起るので、軍人は平戰兩時の別なく一身を賭し、同心協力して責任を猥りにせぬの精神が陸海軍をして世界一ならしめた以所である、（とて佐久間艇長の例を擧げらる）要するに事業の成敗の別るゝ所は、精力集中と否とに依る。幸に諸君が此心掛を以て前途春の海の如き實業界に出らるゝならば、諸君の前途は多望である。諸君は精力を竭盡して事に當るべきである。之は平素から訓練しなければ駄目である。而も此竭盡は永久的であらねばならぬ。長く續かせるには step by step でなければならぬ。故に諸君は、金儲を考ふる前に先づ腕を磨かねばならぬ、磨いた腕で穫つた富は決して放しつこないのである。此點は英國人が最も勝り、學問上所謂エポックメーキングを爲た人は大方英國人である、シエシルローズが南アフリカに成功しながらも、尙ほ牛津大學に學ぶ事を忘れなかつたと云ふ。桂公も同僚より十年も遲れて平然として居た。之が彼をして位人臣を極むるの身分となしめた所以である。急く所には破綻の根が橫はるものである。室咲きの花は凋れが早い。が自然に咲く花の壽命は長い。諸君にして、幸に私の忠告を容れ、今から努力

すれば諸君の成功刮目して待つべきものあるは信じて疑はぬのである。

最近に於て學校は最も悲むべき事件に遭遇したが之れは諸君の心掛一つで禍を轉じて福とする事は決して難くはない。それには諸君が堅忍持久の心、精神集中主義に據つて、春の海の如き將來に對する覺悟が無ければならぬ。私は切に是を諸君に望むのである。云云。

先生が商科のみの會へ御出席されたのは七年振との事で、先生の御話は實に懇篤を極めたものであつた。

之れより餘興に移り、八十島、横内君等の尺八其他浪花節等意外の盛況を收めた。殊に横内君獨特の「汽車眞似」は描八其方除けで大受だつた。かくて十一時校歌合唱、交通科萬歳を三唱し、目出度會を閉ぢた。（委員）

◉ゼミナリー外國貿易科横濱見學　學窓にありて孜々研究の必要なると同時に實地見學の吾人に益する頗る大なるを感じ、我が貿易科は擔任教授小林先生の御盡力により、横濱に於ける諸會社並に官廳の見學を決行せり。十月廿日は宛も本校の紀念日に當りて週日中の休暇を得しかば、午前七時半東京驛に參集、院線にて櫻木町下車、先づ三井物産會社を訪ぬ。エレベーターにて樓上の生絲檢査室に至り、社員の詳細なる生絲品質檢査實驗の説明を聽き、階下にて其荷造を見るなど、得る處頗る多かりき。次に税關に赴き、税關事務官の熱心なる説明にて構内を隈なく一巡して後折から碇泊中の佛國郵船PAUL LECAT(二萬三千噸)なる大商船の視察を爲す。船内の大、客室の壯麗、羨望に絶へず。甲板に立てば港内を一望すべく、他船の如きは唯眼下にあり。堂々たるこの船、汝は我等貿易科の者の友なり。只憾むらくは、今是れ他國船なることを、數倍大なる我國の商船を浮べ、現在にいや益す我國貿易の振起を計り、マストに高く日昇旗を翻し、萬里の波濤を蹴破す、これ懸りて吾人の双肩にありと、一行の氣焔當るべからず。下船して商品陳列室を參觀し、税關に於て「若し十分研究なさる方があらば一週間位毎日御出になれば出來得るだけの便宜を計りますと」の懇切なる挨拶を得大滿足にて此處を辭しぬ。

晝食の爲め解散。一時半再び横濱取引所に集り、喧騒せる場内立會の光景を見て後、應接室にて茶菓の饗應を受けつゝ取引に關し種々懇篤なる説明を聽く。其上各自に定欵、營業細則、營業案内三部宛の寄贈を受け、感謝して辭し、直に農商務省横濱生絲檢査所に至る。六百軒以上より生絲檢査の依頼を受け居るとの事にて、其多忙なる驚くばかりなりしが、よく係りの方の細大洩さぬ説明にて、含水量試驗の見學をなせり。

横濱公園前より電車にて神奈川に到り、横濱倉庫會社に行く。茶菓にて接待の後、熱誠なる校友上野宗氏の案内にて、大豆、米、硫黄油糟、鹽等の保管を觀る。實に數萬坪の構内は充滿せる倉庫列り、鐵道線路縱横に敷かれあるを見ても、當會社の隆盛を知るべし。見終れば、既に暮色こもり、校友の見送を受け割愛して東神奈川驛より東京に向ふ。歸途、新橋太田牛肉店にて會食し、胸襟を披き、各自當日の所感を述べ、互に意見の交換を爲す。宴半にして先生の眞情を吐露せる講話あり。終て各自の詩吟謠曲等盛に出で、歡つきず。校歌の合唱にて散會す。

三井物産會社、税關、取引所、生絲檢査所、横濱倉庫會社に對し、多忙中よく懇篤なる御説明の勞を煩はし、一同の滿足至大、深く茲に感謝の意を表す。（見學員）

◉時雨會懇親會　北澤教授指導の商科二三年讀書會は、會名を得んものと各自考案を運したる結果、集會毎に雨に崇られ、遠足の如きも雨に流さるゝ事多ければ、先頃雨に緣みて時雨會と命名した。用書ソシァリスト、ムーブメント講了せしかば、其の懇親會を十一月廿三日神田今文に開催した。由來我が時雨會は他會と異なれる氣分を有つて居る、個人主義者多き爲めか、集會には談論風發、コスモポリタンと自稱するあり、或はトルストイアン、又はヘーゲリアン等の綽名にも相應しい超俗的な氣分が流れてゐる。斯る會員の懇親會として、開會に際し何等開會の辭もなく、北澤先生を圍んで、各自空腹を滿しつゝ且つ語り、且つ談じた。殊に興味多かつたのは、先生留學中の所感で、ノースカロライナ、ヂョンスホプキン諸大學の學校生活の回顧談には、僕等は居乍ら歐山米水に遊ぶ心地せられた。傳統を嫌ふ此等の人々には、酒なく、美妓なき恁うした會にも、猶且つ樂しけに語りつゝ、或は自稱成功者岡本氏の談や、各自の御國自慢に、先生が生地たる、本所の貧民窟やそれと關聯して社會政策の研究談、先生嚴父の義俠的美談等が盡きなかつた。次でオー君の福岡の鐵、エム君の中京の將來も誇らしけに、エッチ君の甲斐の生絲、K君の賣藥、と次から次に話は運ばれた。歌なく、酒なく、無論美妓なき、清教徒者の集りにも見まほしい、恁うした會は、江湖の漫談よりも、卒業後の就職談よりも、尚ほ樂しけに理想を語り、文藝を談じつゝ、風寒き晩秋の夕を、各自の心靈より流るゝ音律（リズム）の流れを聞きつゝ、其處に合流の共鳴を感じ乍ら、殘り惜けに會を閉ぢたのは、九時過だつた。當夜出席左の如し。

中島　傳吉　阪間孝一郎　北澤　教授
原　儀一郎　田中仙之助　三浦　憲三
小林　商治　盛田　秀平　岡田　利男
（六、十一、三十、憲三生識）

◉稻香會　國漢文科本科二年級生を以て組織せらるる稻香會は其の第一回例會を十一月二十日午後三時より同級の專用教室たる第二十五教室に於て開會した。是洞君の開會の辭ありて直ちに左のプログラムに入る。

一、軍事に關する常識　東郷君
一、批評的精神　芦澤君
一、都人士と田舍漢　大野君
一、出郷の經歷　薗田君
一、茶菓饗應餘興及び五分間演説
一、連歌坡講（會員一同）
一、さすらひの唄（合唱）
一、短歌に就きて　山田君
一、稻香會に對して　栂君
一、彼のロマンス　委員田所君

當日會する者五拾名。一同和氣靄々裡に學窓の午後を樂しく暮らして散會せり。尚山田君首唱の下に二十四教室に於て短歌會組織の協議あり。出席者約二十名。左の創立委員を選擧して散會した。（記錄係報）

A組　山田、筒井兩君
B組　寺尾、長島兩君

◉第十二回稻友會秋季大會　十一月十八日正午より大隈侯爵邸にて開催す。都の秋更けて

肌寒き憾なきにしもあらざりしも、朝來小春日和の事とて、定刻前來會者已に千を算し、尚入場者陸續として踵を接する有樣なり。

德永會長開會の辭を了して降壇するや、宮田理事の熱誠なる訓話に次で、平沼代表理事の篤懇なる講話あり。やがて總長大隈侯爵フロックコートの颯爽たる風姿にて壇上に立たれ、熱辯を振ふ事時餘其雄辯其元氣御病後の侯爵とも見えず、會員一同醉へるが如く、寂として聽きゐるや、拍手の聲萬雷の一時に落つるが如し。次で餘興に移り、琵琶、講談、落語等に歡を盡して和氣藹々の裏に散解す。

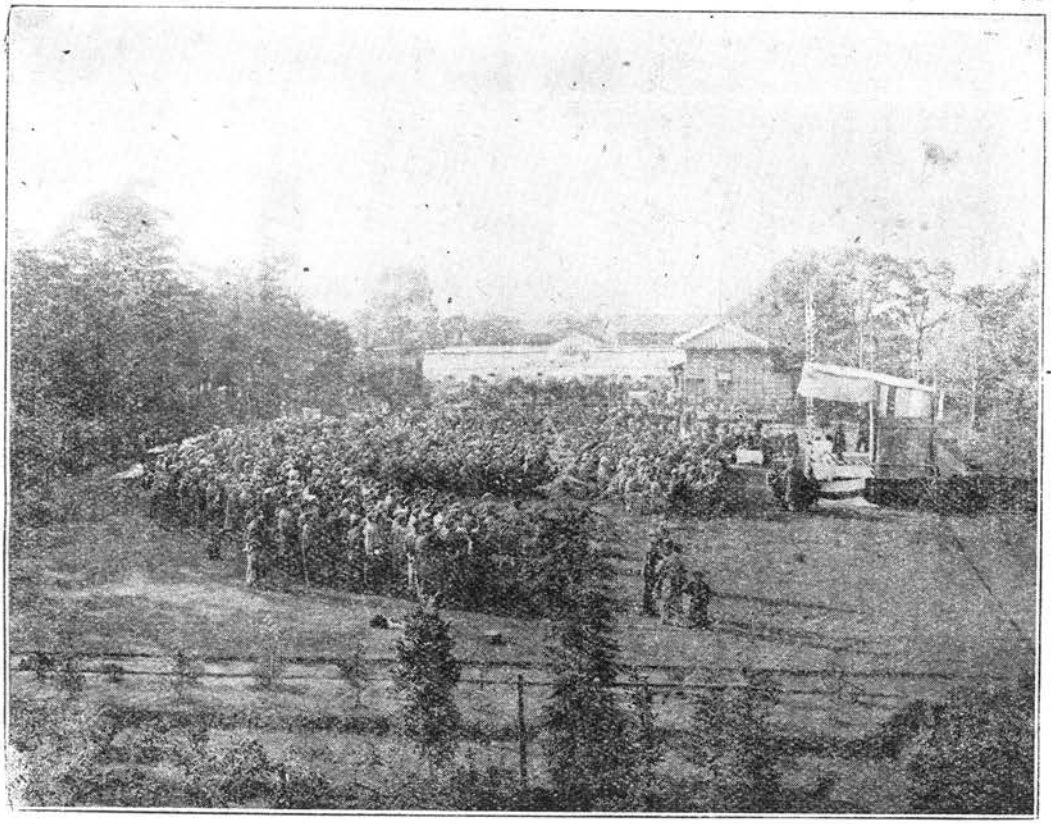
時に午後四時。

◉愛知縣人會成る

愛知縣出身にして早稲田大學に在學する者二百名の多きに達したるに依て、各中學及商業學校同窓會の幹事各二名宛相集り、縣人會を組織するの議を決し、其第一回を十一月三日午後五時より日比谷公園内松本樓に開會せり。席上先づ會則を議し、幹事總代の挨拶に次いで、出席者順次起立して自個紹介を爲し、歡談時の移るを覺えず。九時過に至り、校歌を高唱して散會を告げたり。

尚本會は春秋二回例會を開き、在京先輩校友各位の臨場を請ひ、指導を仰ぐ筈なり。當日出席の學生及校友諸君左の如し。

齋藤　正義　川口　潔　金子佐一郎
中村　健六　鈴置　太郎　山田　正
峰須賀武彦　堀川　恒男　（以上校友）
（五中）白石　勝彦　（五中）伊藤　一郎
（〃）成田謙次郎　（一中）丹羽　清彦
（一中）森定　賢　（〃）山内　敬二
（〃）荒川　幸一　（〃）山田　四郎
（〃）高見宗一郎　（〃）須網　護行
（〃）取飼　正利　（〃）高坂　埝憤
（名商）寺澤增太郎　（〃）武田藤十郎
（〃）中西　政吉　（二中）加藤　榮三
（二中）佐久島順二　（〃）藤田　三郎
（〃）内藤　三樹　（〃）林　宗清
（三中）伊藤　德治　（三中）飯田　幸吉
（四中）中村　要吉　（名中）吉川　信行
（名中）寺西　鐵藏　（明倫）杉山　忠三
（明倫）山内　光政　（〃）牧野　明造
（〃）佐藤　鐵二　（〃）水野　寅治
（以上學生）



大隈侯爵邸に於ける稲友會

◉埼玉縣人會の田中唯一郎氏慰勞會

埼玉縣人會にては、這回會長田中唯一郎氏が母校を引退せられたるに就き、同氏多年の勞に對し感謝の微意を表明する爲め、十一月十一日午后五時より上野精養軒に於て臨時大會を開き、盛宴を張れり。來會者は主賓田中氏を始め、校友學生合せて八十餘名にして、態々地方より上京せる校友も尠らず。一同食卓に着きデザートコースに入るや、校友報知新聞記者太田守男氏は發企人を代表して、三十年間一日の如く、一意專心只管大學の經營に盡瘁せられたる主賓の功績を稱し、熱誠以て慰勞の辭を述べ、且つ校友大阪朝日新聞記者吉田淳氏の祝電を朗讀し、之に對し田中氏は、いと謹嚴なる口調にて、今回圖らずも母校に問題の惹起したるは遺憾の極にして、余は當局者たるの地位上、大隈總長閣下を始め、本大學關係各位に對し責任の輕からざるを覺ゆるものなりと雖も、予や奉職茲に三十年、内は侯爵及高田博士其他諸先輩の誘掖を受け、外幾多校友諸氏の信賴を辱し、唯夫れ母校の發展を事とし、是を生命として今日に到れり。今や志業半にして去るに際し、萬感胸に迫るものあるも、省みて一點の疚しき所なし。今後は校友として飽く迄本大學に盡力せん心算なりと、衷情を吐露せられ、來會者一同をして轉た其心事の公明なるに感ぜしむ。次に加藤代議士、小久江日清印刷專務、中川區會議員及學生飯島大惠作氏等交々起つて主賓の功勞を述べ、小久江氏提出の緊急動議『將來田中氏の慰勞會が本大學關係者に依つて發企されたる時は、本會は本會の名に於て之に參加し、會員擧つて出席する事』を滿場一致にて可決し主客歡を竭し、和氣靄々裡に同十時散會したるが、當夜の出席者は主賓田中唯一郎氏外左の如し。

校友

小久江成一　種村　宗八　岡安　理平
瀬田　武　松下　操　關口　七郎
遠藤高之丞　松谷　徹　增田　國治
福田辨次郎　村田　正勝　中川　重政
坂巻　道一　鹿島　增藏　金井　政吉
永島富三郎　喜多　義之　梅澤　愼六
奥田源兵衛　坂本　隆昌　岡本　季三
太田　守男
（以上在京者）
山本　芳三　小林　哲　塚越又四郎
新井幸三郎　鍋島旁太郎　竹谷　幹吉
齋藤忠太郎　原　巖　細井爲五郎
鈴木　浩一　栗原　雅信
（以上地方在住者）
外に
學生
林　国　金子　實　森田　延作
上利　武　綱野　和一　小宮　義壽
齋藤　登作　野口　達　中野　弘三
坂本四五郎　長島　一夫　矢部　七郎
田島　修三　林　又三郎　山崎　孝藏
高橋　敏次　明戸　一郎　石川　四郎
正木　俊作　原田　光一　星野　季平
高田　義雄　長谷川安兵衛　渡邊喜代司
綱野　吉秀　小島　文雄　齋藤　隆平
石川　常長　持田　宗治　金子　悅郎
清水　滋　石川　滋雄　齋藤　義雄
伊佐山清次郎　宿谷　好介　齋藤　捨六
飯島大憲作　德松　精一　小坂　勝藏
茂木　良三　内田　喜一　大越覺三郎

◎東亞倶樂部支那旅行記（三）

上海概觀

誰れやらがシャンハイ、レパブリッグと言ひしが實に此處は世界列國の博覽會の如し、されば幾多の工場は碼頭に林立して黑煙天に沖し、高層のオフイスは櫛比して其間を過れば恰も山間に在るの想ひあり、車馬の來往織るが如く電車の往復射るが如し、現今の上海は工業盛んに商業殷賑を極むること斯の如くなれど一度び翻つて遙かに六十餘年の昔に遡れば黃浦江岸の一寒村に過ぎざりしと、抑も上海の開港場となりしは阿片戰爭の結果にして西紀一八四二年なり、爾來星霜推し移るに從ひ、發達を重ね遂に現今の如き支那第一の大市場となりぬ、然れども尙古く上海の外國取引の濫觴を尋ぬれば宣教師チャーレス、グラックの天津よりの皈途上海に寄港して商業の比較的盛なるを發見せし結果一八三二年六月二十日ロートアムヘルスト號の吳淞河に投錨せしにありとす、而して上海が東洋に於ける貿易港として重要の地位を占め、中部支那に出入する物資の大集散市場たる所以は其交通の要路に當り商業區域の廣大なると早く外國との通商開けたるに依るべけれど之れ蓋し延長二千七百餘哩の揚子江あるに基けるなり、

試に最近五年間上海貿易輸出入の總額を擧くれば左の如し、

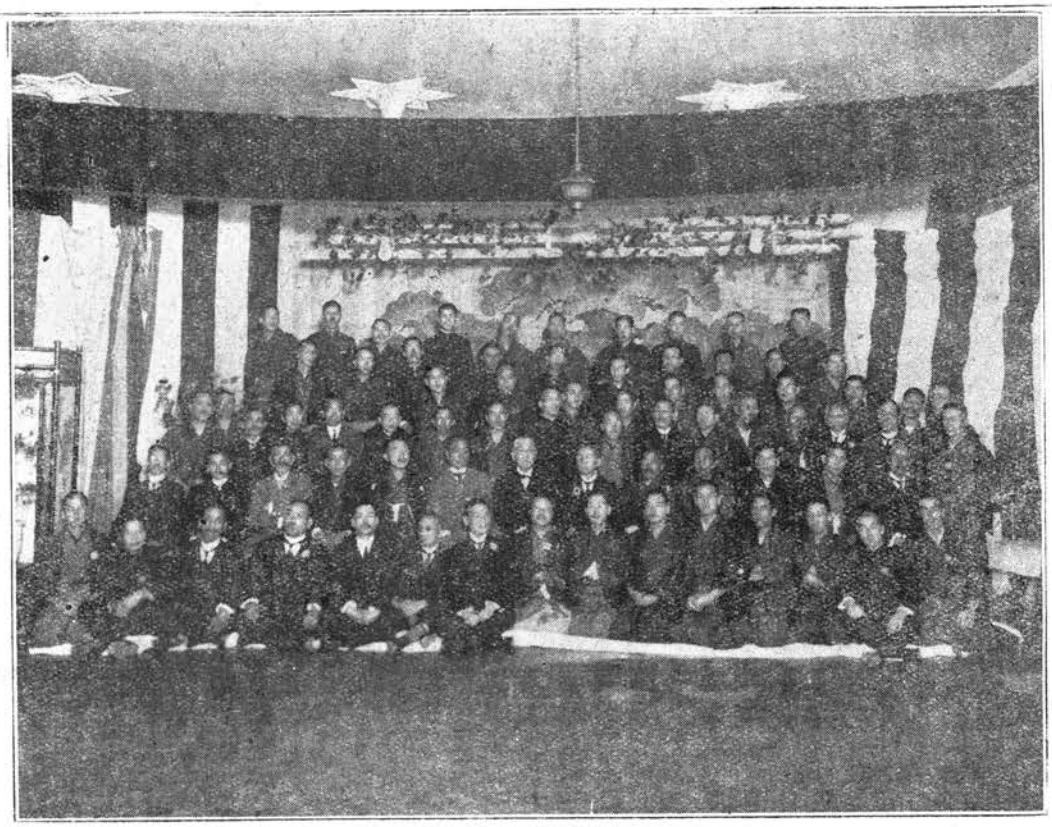
年別	金額
一九一一年	海關兩 八七〇、九八六、四七七
一九一二年	八六九、八七五、五三二
一九一三年	一、〇〇五、七二三、八五一
一九一四年	九五五、四〇三、二五三
一九一五年	九一八、五一三、四五五

右の表に於て漸次其貿易額を增加し來りたるに歐洲大亂勃發以來其額を減少せしめたるは偏へに船腹缺乏に原因するものなるべし、かくて大戰終了後に於ては逐次一九一三年の域を越えて其數著しき增加を見る事想像するに難からず、

尙大正五年度の海關收入を一見すれば、總額一、一四〇萬兩にして前年に比し五六萬兩減なれども其內輸出稅收入は却つて一九一三年に比し三〇萬兩の增加を示せり、之れ歐洲戰爭の爲めに輸出增加せりと見る可し、

感ずるまゝに

政治問題に關しては時恰も張勳の復辟事變當時なりしが案外に平穩にして一體に人心日本に於て支那問題に騷ぐか如く神經過敏ならず、日本人は支那の政變の走馬燈の如く動くを追ふて走るものなり此點に關し西洋人は全く之に反し冷靜に之を視るの長所を有す、日本人の此の短所は國際をなし關係密切なるに依るべけれども少しく心すべきなりと思惟す、支那の政治は當分は全く建設と破壞とを最も近距離に而かも明了に繰り返すものなり、政爭に就いては全然列國殊に日本の意圖を無視して突進する事能はず、愼重に其歩を選ぶべきなりとは單に段一派のみならず南方領袖の意見相一致せ



埼玉縣人會の田中唯一郎氏慰勞會

るが如し、南方派は概して寺内内閣を厭ひ日本に對する感情宜しからざりき、

上海に於ける同胞一萬餘人あるに拘らず日支人の聯絡機關なきは頗る遺憾なりしが、僅かに中日實業研究會なるもの佐原氏に依りて創設せられ日支青年の政治的色彩濃ならざる實業に從事せる者のみを以て組織し氏は自ら其一室と並に材料の一部を提供してライブラリーとなし毎月此處に集りて研究をなす、其結果は現はれて支那研究（年四回發行）となる、

英米佛人等が支那國民文化の開發に從事し、或は學校に或は病院に又は其他に莫大の費を投ずるに拘らず日本が此點に關し餘り冷淡なる如きは支那に對し不親切なるべしとは到る處に於て感ぜられたり、彼の獨支斷交の際獨人經營の醫學校は一時其教職員を失ひて幾百の生徒は方向に迷へる時に當り直ちに日支提携して此醫學校を開校繼續せしならんには生徒側の必要も迫れる際誤解少くして成立すべかりしに事此處に出でざりしは極めて口惜しき事なれとも其邊に志ある人稀なれば是非もなし、皆が皆までさうとは云はねども在支日本商人の内に頗る低級無識のものありて己れの地位と周圍とを顧みざるは誠に痛歎すべきなり、彼等は朝夕直接支那人に接近するものなれば誠意を以て取引をなし支那人をして信頼せしむる樣にしたきものなり、然るに却て支那人を劣等人扱になしたるものあるが如きは警めざる可からず、彼等が國交を害することは尠しとせず、

滬寧鐵路

上海に着きてより六日目の七月十四月午後十一時、前田氏其他の人々に送られて名殘惜しき上海を距る、汽車は滬寧鐵路南京に向ふなり、

滬寧鐵道は上海より起り蘇州鎭江を經て南京に達するものにして延長約二百哩支那に於て最も風光明媚の地方を縫ふて走る鐵道なり一九〇四年起工し一九〇八年を以て竣成し工事費一哩大約一萬五千磅を要したりと

汽車は二等、廣軌なれば案外樂にて友の多くは眠る、上に天堂あり地に蘇杭ありと支那人の誇れる蘇州の美景も月なき夜半の汽車にては何の價値もなし、小兒の頃より誰れも覺えし月落烏啼の寒山寺もあの邊かと云ふ間にいつか汽車が鎭江に着く時分には天地漸く明かなり、

流石に江蘇米の產地なれば窓外一望穰々たり、水青く、山又綠にて微かに旭光を浴ひたる所は宏大の風望又天下の致景と稱すべし、軈て汽車は走る程に前面に當りて野を馳り山に登りて蜿蜒長蛇の如き城壁の迫るを見る吾等は愈〻南京に近つけるを知れり、二百哩は八時間の夢を過ぎて十五日午前七時東亞倶樂部一行は、南京驛外に立ちて實は途方に暮れたり、

雲霞の如くに鬨來する馬夫と車夫は言語更に通せず、地圖の用意怠りて方角全く不明なり、遂に度胸を定めて當度もなく車に乘りて走らす、運よく日清輪船會社の支那言を解せりと見えて車は其前に止りぬ、されど日本人在らず漸く支那人に案内されて日清商船のハルクに到る、ハルクは揚子江岸に浮み此處に汽船著きて荷の揚げ下しをなし、船客の乘降する處なり支那にては之れを蟲船と云ふと萬の人の踏み歩く木と云ふ意味なるべし、此内に事務室外二三室あり、若き稻垣君此一孤城の主として二人の支那人を使用して威儀嚴然たり、實に陸を離れて江の中又別世界と云はん君は頗る磊落、突然の訪問と吾等が請ひを一諾せり、夜は此ハルク内に眠る事とする、

宿既に定りぬ、腹少し輕けれど我慢して千松もどきにて元氣を出し、入艇の車は堂々南京城内に進めり、

中華民國臨時大總統江蘇督軍憑國璋氏の鎭座在ます金陵は定めし輪奐目を驚かすものあり、商賈雄大取引頗る殷盛なるべしと思ひしは誤りなりき、城門既に朽ちて大風に堪ゆべくもあらず、唯古へを偲ぶばかりなり、車は鼓樓に向（鼓樓は大抵城の中央に在るもの）ひて走るに沿道揚樹鬱茂して樹間に鳴蟬喧しく、時に面を何やらにて濡らされ雨かと思へりとて後にて大笑ひせり、兩側殆と畑にて玉蜀黍の數多し、城門を入りて十餘丁は全く郊外の感あり實に長髮賊の大亂は如何に支那の文物を破壞せるかを切に思はしむ、

江戸子風の高尾領事

日本の領事館は鼓樓の右側に立てり、其他の領事館は此處に來る途中悉く右側に散在す、

高尾亨領事は將に馬車を駈つて出て行かんとせるところなりしが、足を止め我等を引見して快談數刻に亘れり、

曾て北京の公使館に通譯官として又書記官として永く居りしに似合はす頗る烈しき江戸子口調にて元氣よく談る、

氏は戊戌の變に梁啓超を助けたる一人なるが梁の心事の不德義なるを好例として多くの支那人が倫理觀念に乏しきを慨し、尙又最近民黨の友人が黎元洪を日本公使館より上海に伴ひ來りて南方政府を上海に設立せんとする事に助力を求め來れることを語りて其計劃に一定の主義政見なく殊に法理の觀念なく南北共に御都合主義なる事を痛歎せり、さる程に十二時を餘程過きたらん空腹はやがて疲勞を覺えたれば午餐の仕度を頼みて急き多賀中佐を訪る、

中佐は保定時代より憑國璋氏に關係を有する人にして在支十五年の長きに及べり、時に憑氏の顧問なりき。

日支親善の根本要諦を經濟提携にありとて、其方法としては彼に工業的智識を與ふ可しと云ふ、

次に田中參謀次長と張勳との關係に付き新聞記事の誤謬を擧げ其悉く正反對なるを說く、田中次長は張勳に若し復辟をなさば君も淸皇室と共に亡ぶべしと之を阻止せしめんとせるなりと而して此事に關しては張勳より憑に送りし書翰にて充分明了なるべし、張は却つて田中氏を利用せんと計りしなり、又憑氏を知らんとせば其背景なる江蘇省あることを忘るべからず、日本人は其背景を別にして憑氏を見んとするは謬れるなり、ホラが峠は江蘇省に在る憑國璋氏としては蓋し止を得ざるなり、然らされば天下大に亂れんと多賀さんは小學校の先生の樣な人物なり多年親密に支那人と交際せる人と外交上にて支那人に相接觸せる人との間に多少の意見の相違を發見せるは是非もなし、但し兩氏は不思議程其交り良し、

皈途領事館にて午餐を認め、馬車にて下關に戻る、一睡して後ち大に支那趣味を味はんとて下關の支那浴場に行く、東道の主は支那事務員李さん、

支那のハイカラ浴場

李さんは頗る愛嬌もの、日本語と英語をほんの少し許り覺え盛にブロークンを發表す、通譯容易ならす、李さんは堂々と高層なる一樓に吾等を導けり、湯屋とは思はれず、鏡面輝く一室に一人一個宛の安樂椅子ある室にて衣を脫ぐなり、誰やらが床や見たいだなと叫びしが誠に然り、

浴場に入れは兩側十數個の人造石の湯槽は相並び一個々々障壁を設けて恰も東京ステーションのダブリュー・シーに這入りしが如し湯と水は自由自在に出し得る構造なれば不潔の感なし斯て全身を洗はれて出れば大きなタオルにて拭ひ吳るゝなり、尙又脫衣室に皈れば洗面器に湯は運ばれ茶は酌まれ熱きタオルは數回取替へらるかくて陶然となる、不圖湯氣の間より上の方を眺むれば定價表あり、驚く可し中に足洗ひ〇〇、背洗ひ〇〇、顏洗〇〇、かくては全身を御任せする時は大變なり、急遽報告は浴室に傳はり、湯につかれる連中は俄かに謹愼となる一人三十仙當りの勘定を濟ませて浴場を出づ浴場

内にも料理あり、藝者も來るなりと、近くの支那料理屋にて薄暗き裡に晩餐を終へ、老酒に氣焔を揚げて一同は愈々支那通となる、

揚子江

對岸浦口の漸く紅となる頃に起き出つれば長江一望千里の風光宛として古畫の如し、南京は舊都なれば名所古跡の見る可きものならんも我等は再び南京に下り津浦線にて山東省に出づる計劃なれば見物は後廻し、午前七時發の裏陽丸に搭じて揚子江を遡る、

抑も揚子江は其源を青海に發し東流して支那本土に入り雲南四川湖南湖北江西安徽及江蘇の七省を貫通し延長二千七百餘哩にして江口は其幅七十哩の廣大なるデルタをなせり、人口七萬を有する崇明島卽ち之れなり、揚子江流域の面積は七十五萬平方哩の廣きに及び、農產物の輸出年額は百萬噸を超え寶に支那中央の富源地となす、汽船の航行區域は本流千五百餘哩更に支流を合せば汽船の通ずべきもの二千餘哩小蒸汽船三千哩民船は實に七千六百哩を航行し得べし、

長江航路各國汽船會社は六社あり各競爭の狀態にあれども日清汽船會社及恰和洋行最も優越なり、日清汽船會社は大型十四艘小型九艘を以て本流支流の航行に從ひ現今上海漢口間に使用せるは七艘にして吾等が乘れる裏陽丸は三千六百噸最大の船なり、

船室は洋人一等、支那人一等、（宮艙）支那人二等（房艙）及三等に分つ、吾等は房艙に在るなり、日清汽船會社にては學生の爲め特に二三割引をなす、

船が蕪湖に着きし時、船中にて懇意となりし南京の若き實業家前田氏は去りたり、

船の進むに從ひ暑さを加へ來り室内に堪えず甲板に出づれども濕ぐ水なければ全身油染じむ、殊に慣れぬ食事を中流以下の支那人とする事なれば船室の不潔と相俟つて氣分を惡くするものありて、食事の時は一同打ち揃へることなし、何よりつらきは水の供給少きと飲料水なき事なり、大椀に注ぎし熱き茶も暫く靜かに置く内には下に赤き砂の溜るを見るべし、

されど船は徐々焉と濁水を排しつゝ遡江するなれば動搖更になく異れる兩岸の風光を眺むる時には愉快ならずとせず、

左岸に山連り江を上るに從ひて樹木多し、沿岸に時々見ゆる五六層の角塔は之れ、州縣の境界なりと夜に入れば支那人胡弓を引き之に合せて唄ふあり或は馬棋と云ふ賭博は殊に甚し、

明くれば七月十七日船は尙江を走るなり、風光昨よりは綠色を加へ山又青し、揚柳は江岸を綴りて人家點々たり、炊煙靜かに昇りて長空閑なり、濁水左右に蹴られて分波遙かに兩岸に迫れば水牛徐に頭を擡げて遠望す、

或は入江あり斷崖あり、入江の中に林あり、斷崖の上に小家あり、茫々たる平原は千里か萬里か、平原中に突として秀つる一小丘は何の爲めの神戲か自然の景色全く奇なり、

◉大阪同攻會消息

▲第一回見學大阪中央電話局參觀　九月二十三日午后一時より參觀す。出席者十七名。同局監査課在勤本會々員清水順之助氏の案内にて引込線、坑道、試驗室、中央局交換室、電動室、監査室、市外長距離交換室、及東分局交換室等順次に詳細なる說明の下に參觀せり。

▲第拾回清談會　九月二十三日午后六時より小原評議員宅に於て開く。出席者小原、國澤、大森、米田、大西、高村、三浦にして盛會裡に散會。

▲第卅四回月次例會　十月十四日午后六時より日清生命支社に於て開催。出席十七名、露國の階級鬪爭、東西社界の比較、鐵道滯貨問題、自治政經驗談ありて舞月屋朗會氏の餘興落語ありて十一時散會せり。

▲第十一回清談會　十月廿一日午后六時より大阪貯蓄銀行福島支店に開催。出席者七名、例の如く談論風發茶菓を喫し、十一時閉會。

尙當日は母校創立三十五周年紀念日に相當する を以て早稲田大學寫眞帖、講演集を取集め大學發展の歷史を追懷すると共に、偶然本會が創立三年半卽ち本大學の十分の一に合致せるは一種奇なりとの感想談ありたり。

▲第卅五回月次例會　十一月十一日午后六時より開催。出席者十八名、三浦常任幹事の開會の辭、會務報告につぎ、和田和一郎氏、米田確也氏の所感談ありて後、陸軍大佐山脇成美氏の「征淸、征露の根本義なる有益なる約三時間に亙る講演ありて十一時半散會せり。

（幹事三浦報）

運動

◉野球團の臺灣

馬尼刺遠征

豫て臺灣の各野球團より招聘せられ居りたる我が野球團は安部部長引率の下に來月冬期休校開始と共に一行十六名同地に向け出發。約二十日間滯在し臺南臺北に試合を試み、終了後馬尼刺に渡り、二月一日より十日に至る同地カーニバル祭に出場し、過般極東オリンピックの際來朝せる馬尼刺野球團其他のチームと試合を爲し、二月十二日郵船會社の丹後丸に搭乘し、二十二日神戸歸着の豫定なり。尤も安部部長は臺灣だけで歸東せられ、馬尼刺渡航は選手一行の自治的旅行の筈なり。（十一月廿日稿）

◉野球部消息

滿都好球兒の指折り數へ待ち詫びたる四大學秋季野球戰は十月十三日慶明第一回戰を劈頭に早明、早法、慶法戰と各々開戰。我が野球部は明治と四回、法政と三回試合し、左の成績にてシーズンを終る。

▲十月十四日　早、法第一回戰は法政新グランドにて擧行さる。此日今秋始めての催しなる複試合にて、午前十一時より早、法戰、午後二時より慶、明戰開かれ、興味益々加はり定刻前觀者充滿す。（審判直木、八代、兩氏）

法政屢々吾軍を危地に導きたるも及ばず。第八回四球の本吉武滿の右翼二壘打、林田二壘ゴロに生還。第九回岩田右翼二壘打、由家、井土の失に出づる時、淺井中堅に二壘打して二點を占む。吾軍は第一回市岡の左翼三壘打に、飯田、中島生還。自ら投手の惡球に本壘に入る。高松、井土、共に四球に出で、坂野絕好の右翼安打に生還。一擧五點を占む。續いて第二回敵失に二點、第三回遊擊の失に出でたる池田、飯田の一壘ゴロに生還。第六回飯田市岡の遊擊ゴロに生還。合計九點を入る。法政軍最後の奮鬪も效なく九對三にて大勝す。

▲十月廿四日　早法第二回戰擧行す。（審判三宅、森茂兩氏）

吾軍投手橋本法政軍を打たしめず、第五回淺井安打し、井土の失に三壘に入り、武滿二壘にあり、明敏なる市岡巧みにサインを看破して淺井を本壘に刺す。然し井上の右翼安打に武滿生還し、惜くもシャットアウトを逸す。之れに代り、吾軍は猛打威を奮ひ、毎回走者

あり、第二回、高松得意のロングスイングに球は右翼の柵を越え、美事なる本壘打に劈頭の一點を占め、第三回二死後市岡中野に三壘打、高松死球捕手暴投市岡生還。續く井土右翼三壘打に高松生還。一擧二點を占む。第七回四球の坂野飯田の絶好の中堅安打に生還。第八回中島四球市岡左翼安打、高松二壘ゴロ市岡を殺したるも、中島三壘に入る。高松盜壘其間に中島生還。井土遊擊に打ッて高松入り、合計六點、吾軍再び大捷す。

▲十月廿七日　早明第一回戰を戸塚にて行ふ。（審判森茂三宅兩氏）兩軍力量伯仲し、死守惡闘大接戰となり、最終九回中島遊擊の先に出で、市岡高松の打擊效なく、二壘に殘壘と思ふ時、井土の一打遊擊に飛び、安藤一壘に惡投して中島觀者狂呼裡に決勝の一點を占む。明軍決死の奮闘も效なく一對零にて敗る。

▲十月卅一日　天長祝日なり。例により複試合午前十一時より、慶法戰あり。法政由家投手健闘遂に城南の覇者三對二にて敗る。午後二時早明第二戰擧行。（審判三宅森茂兩氏）第一回戰の形響と午前の試合のため、さしも廣き戸塚グランドは人を以つて埋る。兩軍好守好防第五回に吾軍池田の唯一の失は大澤の生還を許し、吾軍遂に一對零にて敗る。

▲十一月十日　早明第三回戰開かる。（審判平井腰本兩氏）

吾軍第二回戰の敗に益々自重して戰ふ。第四回坂野中島井土の遊擊ゴロに生還して、氣勢大いにあがるも、第五回池田の失に明治一擧三點を占め、再び吾軍敗る。

▲十一月十一日　早明第四回戰擧行。（審判森茂明石兩氏）

前二回の敗戰に吾軍決死の勢にて戰ふ。第一回明軍無異吾軍飯田四球坂野一壘の失に生き、矢部死したるも、飯田坂野進壘す。時に好漢中島内野安打に飯田本壘に入る。續く井土のバンド坂野生還。尚中島三壘に井土二壘にあり。市岡の遊擊ゴロに二者還り、一擧四點を占め、大勢定まる。爾後明軍橋本に封ぜられ、得點し得ず。我軍第五回飯田右翼に三壘打を飛ばし、坂野二壘ゴロに入壘す。合計五點即ち五對零にて勝利を得たり。

▲十一月十三日　早法第三回戰を法政運動場にて行ふ。

吾軍老巧伊藤投手板に立ち、敵をシャットアウトし遂に第八回四箇安打四球一敵失三にて一擧五點を入れ、吾軍大捷す。

本シーズン成績次の如し。

早明第一回戰	一對零	吾軍捷
同　第二回戰	一對零	吾軍敗
同　第三回戰	三對二	同　敗
同　第四回戰	五對零	同　捷
早法第一回戰	九對三	同　捷
同　第二回戰	六對一	同　捷
同　第三回戰	五對零	同　捷

▲十二月一日　戸塚グランドにて横濱商業と試合を開く。吾軍新進澤、久慈のバッテリーにて戰ひ、八對零にて大捷す。

◉競走部第二回秋季競技大會　十一月二十三日（祭日）午前九時より本大學運動場に於て當部第二回秋季競技大會を擧行せり。定刻を期して會する部員校友並に來賓合せて出場選手約九十餘名。此日は日齒の山内氏、千葉園藝の早川氏、外四五名の選手來場競技に加はり一層の盛會を呈せり。競技種目二十四回にして、優勝者には各紀念銀牌を贈與したり。此の日百米突競走の一着金成麗氏及び金成良雄氏のローハイハードル並に山内敬二氏の砲丸投げは何れも過般全國競技大會に於ける記錄を破り、尚ほ其の他諸選手の競技も壯觀を呈し、觀覽者の拍手に迎へられ、一日の盛を盡して午後五時閉會せり。尚ほ此日來賓として早實對曉星中學の對校競技を加へたりしが早實奮戰の效なくして敗れたり。

競技種目及優勝者姓名左の如し。

百米突	十一秒五分四	金成麗	
二百米突	二十五秒五分二	鈴木六郎	
四百米突	五十八秒五分一	鈴木六郎	
八百米突	二分十七秒五分二	生田喜代治	
一哩	五分五秒	生田喜代治	
ローハードル	二十九秒	金成良雄	
ハイハードル	十九秒五分二	金成良雄	
砲丸投	十米突一	山内敬二	(一)
同	九米突三五	井上松雄	(二)
圓盤投	二十二米突	生田喜代治	
槍投	四十二米突一五	金成良雄	
走幅跳	五米六	橋本隆造	
棒高飛	九呎二吋	井上松雄	(一)
同	九呎〇吋	鈴木龜吉	(二)
十哩マラソン	五十二分三十秒	生田喜代治	(一)
同	五十五分四十五秒	三浦彌平	(二)

◉稲門艇友會秋季大會　十一月十一日午後五時から神樂坂末よしで開催。宮木幹事の挨拶があつて、新に入會した瀬川秀行、三木武吉兩氏を紹介し、鹽澤會長から次期の幹事を左の如く指名した。之れは海外及地方に去つた、椋原政治、川上英男兩氏を除き全部再任したもので、其補欠は必要に應じて指名する事を附言した。

岩田豐之助、入澤忠二、西山已之助、二階堂行善、小熊倉次郎、小笠原勁一、上村鐵雄、田中滿左志、辻穆、山本義之、柳田美津男、松江房次、深澤政介、兒島俊之助、水谷武、三輪吉太郎、宮木昌常（常任）澁谷三一圓五郎、盛山智利、杉本光治（常任）

次で宮木幹事は再び起つて、過般の暴風雨にて母校艇庫倒壞し、端艇九艘大破し、艇番の妻壓死せるを報じ、之れが爲め、秋季水上運動會は中止の已む無きに至りしが、其善後策として直に艇庫再築、端艇の大修繕及競艇三艘新造の計畫を建て之を以て學校當局者の承諾を求めつゝあるが、天災の事とて略ぼ其承諾を得、端艇部復活は着々順境に進みつゝあり、尚ほ艇友會としては艇番に對し香典金二十圓を贈りたりと報じ、更に母校紛擾問題の經過に入り、一度母校の宿弊なるもの投書に因つて新聞紙上に掲げらるゝや、所謂學長問題なるもの惹起せられ、紛糾に紛糾を重ぬるの形勢となつた。玆に於て本會常任幹事等は其内情を探ぐるに、新聞紙等に流布さるゝ事實に誤り多きを發見したので、八月第一日曜日の茶話會を深澤幹事宅に變更し、當日集合したる、深澤、水谷、鈴木、三輪、小熊、西山、澁谷、兒島、杉本、宮木の十名は稲門艇友會々長鹽澤博士が渦中に在るを以て、有志の名の下に在京濱校友二百九十餘名の贊成を得て眞相を發表せられん事をとの決議文を大隈總長、天野學長、鹽澤、兩田中三理事に提出し、其後水谷、深澤、宮木三名の名にて再度決議文を維持員會に提出した。然るに九月の授業開始に當り校友學生中の一部に依つて學

校は占領さるゝの醜態を演じたので、今は默すべき時に非ずとなし、稻門艇友會の大會を開き、暴舉に依つて引退する六理事の留任と授業を開始せしむべしとの決議文を決し、出席者全部を實行委員とした。其後岡田文相の意見として休校期間を終ても尙ほ授業開始し能はぬ時は閉鎖を命ずべしとの事傳へらるゝに及び、本會は校友會幹事有志、校友中正團校友實業團、雄辯會校友有志等と共に母校擁護團なるものを組織し、本會はこれが中心となつて何等の支障なく授業を開始せしむるを得たが、六理事留任は反て時局拾收に困難を來すべきものと認めて撤回した。本會の行動は母校內外の認むる處となつたが、之れを機として本會は今後も有力なる校友の一團體として活動すべきを報じ、最後に休刊中の會報を來年度より小册子として毎月又は隔月刊行すべきを約し、毎月第一日曜午後一時より向島言問に開催の茶話會に多數の出席あらん事を希望した。斯くて宴に移りしが、宴半ばにして、杉本幹事は新艇建造に關し、其參考に資する爲新舊選手に現在の競艇の改良すべき點を質して其答案を求むる事を建議して滿場の贊成を得、歡を盡して散會したのは午後十一時、當日の出席者左の如し。

鹽澤　昌貞	氏家　謙曹	瀨川　秀行	
三木　武吉	深澤　政介	水谷　武	
三輪吉太郎	西山巳之助	小熊倉次郎	
石井　英祐	齋藤春太郎	澁谷　三	
島崎　尙	辻　稽	兒島俊之助	
橋　靜二	松宮　三郎	山本　義之	
栗尾　精一	喜多森一郎	杉本　光治	
宮木　昌常			

雜報

◉大隈維持員一行の歸京

維持員大隈信常氏校友代議士關和知、櫻井兵五郎、三氏其他二三氏同伴支那朝鮮漫遊の事は前號既に記載せし所なるが、日程約四十餘日にて無事漫遊を了へ十一月二十二日午後八時半東京驛著歸京せられたるが、今其の漫遊土產の梗概及旅行日程を得たれば、左に揭載して讀者の一粲に供すべし。

●支那土產（維持員大隈信常氏談）

今回の旅行中最も愉快にして且つ印象の最も深かりしは到る處に於ける我が早稻田校友諸君の熱誠を籠められたる歡迎に接したることにて、同時に早稻田關係者の新領土は勿論支那の朝野各方面に非常なる發展を遂げ偉大なる勢力を占め居ることは全く想像以上なるに驚きたり。一行中には櫻井、賴母木、關三代議士の何れも校友なるに加へて、余の親友にして本校の有力なる同情者たる橫山章君及原文次郎君の同行せられたることゝて、終始早稻田の氣分に圍繞せられたり。

十月十一日東京を出發し十四日夜**京城**に着すや十五日午後六時より京城在留の校友諸君は佐賀縣人石川縣人會と合同して花月樓に一行の歡迎會を開かれ、出席者百餘名頗る盛會を極めたり。奉天に向ふ途中、校友新義州驛長櫻井君に迎へらる。二十日**青島**に着す。卽夜一般官民歡迎會の席上校友數名を見たり。二十二日は**大連**校友會の歡迎會にて、會場は千勝亭、出席者六十餘名、純粹の同窓會にて、唯根滿鐵交涉課長開會の辭を述べ余之に挨拶せり。唯根君の外商業會議所には篠崎書記長あり。工科學堂には岡田敎授あり。實業界には中川、佐賀、新聞界には加藤君等、其他大連の公私各方面に於ける校友諸君の活動は實に凄まじき者あり。廿七日夜**奉天**金城館に於ける歡迎會にも亦數名の校友あり。就中瀋陽地方裁判所檢察長張蘆臣、奉天省長公署總務科丁鑑修二君の共に我が校友たりしは珍らしく嬉しかりき。更に同地に於て張督軍を訪問したる際、督軍と余との對話を通譯されたる陶君も嘗て早稻田に在學したるやに記憶せり。三十日より十一月五日に至る**北京**過日の滯在は又格別なる紀念にして、今に回想するも快心に堪へざるを覺ゆ。一日夜中央公園來今雨軒に於ける早稻田同學會幹事陸宗輿、解樹强、林長民、姚震、江庸、黃雲鵬、陸夢熊、神尾茂諸君の主催に係る歡迎會は、日支兩國の校友五拾餘名、その大多數は支那側にて林司法總長、江同次長、曹交通總長、陸前駐日公使、范敎育總長、劉國務院參議、姚大審院部長、姚中國大學校長、其他朝野名流悉く稻門の同窓にて、林總長が盃を擧げて侯爵閣下並に一行の爲めに健康を祝されし時は、實に感極まりて余は之に答ふるを知らざる程なりき。折柄在京中の校友、國民黨の大內暢三君、及桑田豐造君も加はりて、一層興味深かりき。尙三日には司法部に於ける校友姚震、汪燧芝、林棨、江庸諸君の特別主催にて、中央農事試驗場內暢觀樓の午餐會に招待され、食後園內を散步し、一同撮影せり。北京監獄をも視察せるが、典獄も亦校友の一人なりき。要するに、民國今日の司法部は、殆ど早稻田出身者を以て其要部を占め、威嚴と信用とに於て、毅然として中外の仰ぐ所たるは一般の認むる所にして、現に芳澤公使館參事官の親しく余等に語られたるに徵するも、決して自贊に非ざるを知るべし。此外私立中國大學の如き、姚校長賀敎授を始め、職員の多くは皆校友にて、其の學科學制等全く我が早稻田の專門部に範を取れり。學生一千五百、卒業生既に千餘名を出せりと云ふ。二日余は關、桑田、橫山三君と同校を參觀し、午餐を供せられたり。此外劉宗傑君が余等の爲めに、特に中央政府の迎賓館（故袁大總統の邸）を開きて北京到着卽日午餐に招待されたる、或は滯在中國務院の自働車を余の乘用に供せられたるが如き、陸宗輿君が盛宴を私邸に張りて懇に歡待の誠を表せられたる厚意實に感謝に堪へず。其他、梁啓超、曹汝霖、湯化龍、張國淦等各總長の交互に招待せられたる際も、林、范、江、陸、劉、姚の各校友は或は陪賓として、或は時に通譯を兼れ、終始一行の爲めに周旋盡力せられたり。北京を去る前日卽十一月四日午後三時馮大總統に謁見し、又其夜一行は留別の宴を長春亭（日本料理屋）に設け、陸、劉、江、姚の各校友及源（大總統附譯官）君を招待し、聊か謝意を表したり。

漢口には六日夕三時半着、八日夜九時出發、やがて二日半の滯留なりしが、北京以來一行非常に疲れたるを以て、同地に於ける一切の歡迎を辭退し靜養を試みたる爲め、校友會の催しも自然之れ無かりき。然も此地に於ける校友約二十餘名、何れも活動しつゝあるを聞けり。

上海に於ける校友會は十六日夜七時より日本倶樂部に於て開會、日支校友四十餘名、森君（同文書院敎頭）金邦平君（前農商總長）交も立て歡迎の辭あり。余之に答ふ。席に小崎上海在留民副團長、前安徽都督府顧問たりし律師周成君等あり。

漢口を下りて途次**大冶鐵山**を視察せし際漢冶萍公司の晩餐會に招かれしが、鐵鋼廠の代表者黃錫賚君の歡迎の辭を通譯せし陶梨芩君が、突として自分は早稻田大學の校友なり、今大隈先生を此に迎へて通譯の任に當るは光榮にして且愉快なりと語り出でたるには、此處にも早稻田の勢力を認め得ることが意外にも又痛快なりき。

如斯朝鮮、滿洲、支那各地到る處に於て校友に接し其歡迎を受くるは、他の種々なる歡迎饗宴等に比して一層難有く、我ながら異境客旅の感を忘れき。殊に多くの校友中には、日支の何れを問はず、余が嘗て敎壇にて親しく指導敎育したる學生諸君の、今は堂々たる大官となり、或は立派なる紳士となれるが余に對して先生々々と呼び稱せらるゝには、聊か

ならず恐縮を感じたり。

●旅行日程

十月十一日　午後三時東京出發。
十二日　午後京都にて一行會合、即夜出發。
十三日　午後九時下の關發。
十四日　午前七時釜山着。
同　日　同十時發。午後九時京城着。
十五日　午後六時校友會歡迎會。
十六日　正午山縣政務總官午餐會、午後六時三井物産高野支店長晩餐會。午後十時京城發。
十七日　午前三時平壤着。正午官民聯合歡迎會。
同　日　午後二時半發。
十八日　午後八時大連着。
十九日　正午出帆。
二十日　午前拾時青島着。本鄕司令官招待午餐會。午後六時官民聯合歡迎會。
廿一日　正午出帆。
廿二日　午前十時大連着。午後六時校友歡迎會。
廿三日　午前七時半發旅順視察。正午宮尾關東都督府民政長官午餐會。午後六時大連商業會議所主催歡迎會。同九時三井物産招待會。
廿四日　午後六時南滿州鐵道會社晩餐會。舊藩平戸人招待會。
廿五日　午後六時出發。
廿六日　午前九時半長春着。午後零時半引返し奉天に向ふ。午後八時奉天着。
廿七日　正午赤塚總領事午餐會。午後二時張督軍訪問。同六時官民聯合歡迎會。
廿八日　午前七時出發撫順に向ふ。正午米倉炭礦長招待。即日奉天歸着。
廿九日　午前十時半發京奉鐵道にて北京に向ふ。
三十日　午前十時北京着。正午迎賓館に於ける劉氏午餐會。午後八時芳澤參事館晩餐會。
卅一日　午後八時日本公使館天長節祝賀會。
十一月一日　午後七時早稲田同學會歡迎會。
二日　正午梁財政總長午餐會。午後三時段總理訪問。同四時徐世昌君訪問。同七時陸前駐日公使招待晩餐會。
三日　正午司法部校友招待午餐會。午後八時林公使晩餐會。
四日　午後一時曹交通總長、林司法總長招待午餐會。
五日　午前十時半京漢鐵道にて漢口に向ふ。
六日　午後三時半漢口着。
七日　正午漢陽鐵廠午餐會。
八日　午後六時瀨川總領事晩餐會。同九時出帆。
九日　午前二時大冶着。午後七時漢冶萍公司晩餐會。
十日　午前二時出帆長江を下る。
十一日　午後二時南京着。同夜十一時滬寧鐵道にて上海に向ふ。
十二日　午前七時上海着。
十三日　午後六時三井物産藤村支店長晩餐會。午後二時岑春煊、孫洪伊二君訪問。
十四日　正午三井物産學士會招待會。午後六時神崎三井調査課長晩餐會
十五日　午前七時杭州に行く。同夜西湖に一泊。
十六日　午後六時上海歸着。同七時早稲田校友會歡迎會。
十七日　正午出帆歸朝の途に就く。
十九日　午前九時長崎着。正午小川寅六君午餐會。午後六時校友會商業會議所聯合歡迎會。
二十日　午前十一時半長崎發。
廿一日　午前七時神戸着。橋本喜造君午餐會。
廿二日　午後八時半東京歸着。

◎學生處分　左記八名は不都合の行爲あり、停學に處せられたり。

專門部政治經濟科一年	茂木　久平
大學部政治經濟學科一年	尾崎　士郎
同　上	信藤　寛
大學部商科三年	沼田　鐵藏
同　一年	岡田　隆文
專門部政治經濟科二年	高木　末吉
專門部法律科三年	小島　信章
大學部政治經濟科二年	重松愛三郎

●日清生命保險株式會社祝賀式

日清生命保險株式會社は十一月十八日其の十週年記念を兼ね新築落成祝賀式を永樂町の新築本社に擧げたるが、三階檜舞臺には能狂言、後庭に打張られたる大天幕内には大神樂、手踊等の前餘興あり。式は午後三時二階式場に於いて開かる。先づ中野社長より一場の挨拶あり。後ち池田專務の事業報告に次いで、來賓大隈侯爵の祝辭演說、東京商業會議所會頭藤山雷太氏の祝辭ありて閉式。式後摸擬店を開いて園遊會。更に三階に設けられたる食堂を開いて立食の饗應あり、午後五時過散會せるが、來賓五百有餘名にして盛況なりき。

◎佐々講師の逝去　多年國文學及俳諧の講義を擔當し居られたる講師文學博士佐々政一氏は、十一月十五日不圖腸窒扶斯に罹り、赤十字社病院に入院治療中の處、其後經過不良、二十五日午後四時十分遂に逝去せられたり。享年四十六。

之れより先き博士危篤の報天聽に達し、二十五日左の如く特旨を以て位階陞叙の御沙汰ありたり。

東京高等師範學校教授
從五位勳六等文學博士　佐々政一
叙正五位（特旨を以て位一級被進）

葬儀は十一月廿九日午後二時青山齋場に於いて神式を以て擧行せられ、同日午後七時東京驛發、翌三十日午前十時京都市上京區吉田町神樂岡に埋葬せられたり。

◎菊池溪琴先生の贈位　本大學教授菊池三九郎氏の祖父溪琴先生は十一月十七日を以て特旨贈正五位の恩典に接せり。蓋し武光の正裔にして文武並び修め終身國事に盡瘁したるを以てなり。

大正六年十二月十日印刷
大正六年十二月十日發行
東京市牛込區白銀町二十九番地三十五號
編輯兼發行人　前田多藏
東京市牛込區榎町七番地
印刷者　渡邊八太郎
東京市牛込區榎町七番地
印刷所　日清印刷株式會社
府下豐多摩郡戸塚町字下戸塚六百四十七番地
發行所　早稲田大學
早稲田大學校友會

イブセン傑作集

第五 野鴨

【新刊】

早稲田大學講師 坪内士行譯

四六判布製 正價九十錢 口繪數葉入 郵税八錢

家庭劇として「野鴨」前後五幕はまことに渾然玉の如く、遺傳や結婚問題、此の世に活き行く道を論じながらも些の難澁さを覺えぬ巧妙の手法と人情味の深さとは此の作がイブセンの作中最も舞臺の上に於て成功した歴史を見ても知られる。殊に作中の少女ヘドヰッヒの如きは近代劇中稀に見る可憐の娘で、常に讀者、觀客の涙を誘ふ。從來の日本譯を凌駕するの抱負と、一讀直ちに舞臺を連想しうるだけの用意と興味との下に譯された本書は、依例懇切を極めた緒言と共に、必ず讀者の滿足をうること丶信ず。

坪内士行、島村民藏譯

第一 人形の家（再版） 島村抱月譯 四六判布製 正價九十錢 郵税八錢

第二 海の夫人（再版） 島村抱月譯 四六判布製 正價九十錢 郵税八錢

第三 ロスメルスホルム 坪内士行譯 四六判布製 正價壹圓 郵税八錢

第四 小さいアイヨルフ 坪内士行譯 四六判布製 正價九十錢 郵税八錢

發兌 東京牛込早稲田 振替一一二三番 早稲田大學出版部（賣捌）東京堂 至誠堂 北隆館 東海堂 大阪 盛文館 名古屋 星野書店 其他

●カーネギー平和財團依託發行●

永續すべき平和の基礎

コスモス著　法學博士　鹽澤昌貞訂　文學士　煙山專太郎譯

四六判布製
全壹冊
正價金八拾錢
郵稅金八錢

新刊

姑息の平和を排斥して永久の平和を確立せんには如何なる條件を以て媾和條約を締結すべきか、戰後の國際關係を如何に處理すべきか、其實現の方法は如何、是等當來の諸問題に關して有力なる輿論を喚起するは刻下の急務なり、米國第一流政治家の匿名を以て著せる本書は其識見博大論旨剴切媾和條件講究者の爲に無類の好著なり、カーネギー平和財團は思想界の指導者に廣く本書を提供し其研究結果の續々發表せられて堅實なる輿論の釀成せられんことを切望し之を各國語に譯して廣汎の流布を圖れり、本譯書實に其依託に成る、憂世愛國の士の再讀三讀を希ふ

發行所　東京牛込早稲田　振替一一二三番　早稲田大學出版部

賣捌　東京堂、至誠堂、北隆館、東海堂、大阪盛文館、名古屋星野書店其他